

近世の紀行文・道中記に書かれた立山禪定登山の実情についての一考察 —三河の国学者 渡辺政香の紀行文『北游藁』の記述を中心に—

吉野 俊哉

はじめに

江戸時代、立山には毎年一夏に6,000人ももの登拝者が訪れたと言われる。その中には年齢や立場の違う農民や町人、武士や文人など様々な人たちがいた訳だが、何れの立山禪定登山も彼ら一人一人にとっては、費用と時間をかけたかけがえのない旅であった。そんな彼らの立山山中での体験や見聞には、帰郷後の土産話になっただけではなく、文字情報に残されているものもある。それらは道中の支払い控や行程の記録、また随想や詩歌など多様な形をとるが、どのような形のものであれ、当時の立山山中の様子や登拝の実態を知る貴重な一次史料である。

立山山中での行動や行程は、各地に残るそれらの文字情報（以下、立山山中でのそれらの様々な情報を記録した文書を総称して「立山紀行文」）を通して分かってきている。登拝者が山中で聞いた説話や案内された場所、そこで感想といったありのままの立山登山の実態は、書かれた時代や書き手が違う複数の「立山紀行文」の記述を整理することで具体的になることである。仲語が山中で語った名所にまつわる伝説や開山説話等のバリエーション、山中にあった諸堂舎や地名などの実態は、今後もそれらを蓄積し丹念に比較・分析によって明らかになることであろう。

これまで、江戸時代に書かれた「立山紀行文」を精読し、立山山中の実情や各所に伝承する説話が、時代や筆者の立場の違いによりどう記録されてきたのか整理してきた。そこからは表記の揺れは勿論、彼らの目や耳を通した率直な感想も含めて、山中で立ち寄った場所、そこで語られていた説話の内容から禪定登山の実情が具体的に見えると考えるからである。そのためには、幅広い時代の異なる立場で書かれた様々な「立山紀行文」を参照する必要がある。

筆者は、西尾市岩瀬文庫が所蔵する、三河の国学者渡辺政香が立山を訪れた記録を含む文政5年（1822）の旅を記した紀行文『北游藁』（以下、「本史料」ともいう）の複写資料を入手した。立山山中の記述を翻刻し内容を分析したところ、これまで管見した「立山紀行文」と比較して特徴的な部分を含み、そこには禪定登拝者たちが見聞きした立山山中の実態を補う史料的な価値があると思われた。

そこで次章以下、先ず「本史料」の史料価値を論ずるために必要な著者渡辺政香の経歴や著述活動歴などを挙げた後、「本史料」の書誌と政香の文政5年の旅の概略を紹介する。そして、岩嶽寺から芦嶽寺へ行き、禪定登山後に下田へ戻るまでの足かけ4日間の行程部分を軸として、これまで管見した複数の「立山紀行文」の記載との比較分析を通して具体的な山中の実態を整理し、「本史料」の「立山紀行文」としての価値を確認したいと思う。

尚、書誌の詳細は後述するが、『北游藁』には最初に書かれた初稿本と、その後改稿増補した再稿本が存在し、岩瀬文庫ではそれぞれを甲、乙と分類している。小稿では両者を翻刻して校勘した上で、先ず甲（初稿本）からの引用を示し、刪削による差異を取り上げて論ずる必要がある場合には、乙の記述を並べて引用した。また本文中に引用した部分と重複するが、甲、乙それぞれの序文と立山禪定登山部分の翻刻文を、末尾に掲載した。

1. 著者渡辺政香について

1-1 生い立ち

江戸時代の国学者・神職であった渡辺政香（安永5年〈1776〉～天保11年〈1840〉）は、三河国幡豆郡寺津村（現・愛知県西尾市）に生まれた。生家は寺津八幡社の神職を務める家柄で、24歳で家督を継ぎ同社の神官となった。寛政2年（1790）には15歳で儒医浜島錦城に入門し和漢の史籍や詩文を学んでいたが、政香は思想的に錦城に最も深い影響を受けたと言われる⁽¹⁾。その後、伊勢外宮御師で漢詩人の山口凹巷にも師事し、更に文政6年（1823）には、凹巷を介して伊勢の国学者足代弘訓からも和歌を学んでいる。これらの経歴を見ると、学問に対する熱意は勿論、幼い頃からそれらの学問に触れる機会に恵まれたことが、政香の教養形成につながっていたことが分かる。

そして政香の生涯を振り返ったときもう1つ挙げておくべき点は、旅行を好み遠方への旅を繰り返し、その度に紀行文を残していることである。これは政香が師事し、やはり旅好きだった凹巷の影響が大きいと言われる⁽²⁾。凹巷には度々自作の詩や紀行文の添削を求めたというが、政香が自身の紀行文を改稿していた背後には、そんな師の姿のあったと言えるだろう。「本史料」からは、好奇心や探究心が旺盛で旅好きな教養人、詩歌を愛した文人の姿が窺われる。

1-2 事績

後世に政香を郷土の偉人として顕彰した文章では、概ね2つの事績を挙げている。1つは各地に残された様々な文献を参照し、三河地方に関する詳細な歴史や文化誌を記録していたこと。もう1つは、神職として様々な階層の人たちと身近に接しながら、弱者救済の立場で農民の側に立ち一揆の仲裁を行ったことである⁽³⁾。前者の代表としては三河国に関する歴史文化や人物をまとめた地誌『参河志』の編纂や、天保7年（1836）に三河国加茂郡で起こった大規模な一揆を活写した記録『鴨の騒立』の執筆がある。また後者の代表としては、同じ年に寺津村で起こった一揆の際に農民の側に立って大浜陣屋との間に入って仲裁したことがある。その顛末は『寺津村旧記』に書き残している。

そのような三河地方に関する著書その他、紀行文集、詩文集などを含め『国書総目録』には43件を記載するが、その精力的な文筆活動の背景にあって、「本史料」を含め数々の紀行文の執筆でも重視していた点が2つあったと考えられる。

1つは、記録性と細部に亘る客観性の重視である。前述の『参河志』では、その編纂に際して三河のみならず江戸や京、大坂などで三河地方に関する広い分野の資料やその写本の収集を行っていた。各地を旅行した際にも客観的な記録の重要性を意識していたことは、道中の見聞のみならず、関心を持った場所や訪れた各地の寺社について、後から関連文献を参照して内容を補う姿勢にも反映していたと思われる。

もう1つは、保存の重視である。政香が収集したそれらの資料や自著稿本を収めるため、境内に私設文庫「寺津八幡書庫」を設けたことである。それらの蔵書は、現在でも三河地方の歴史や文化を知るうえで貴重な一次資料群とされる。しかもそれを個人的な書庫とせず、蔵書を地域の人々に公開し広く閲覧を許し、地域での知識の共有と啓蒙に役立てていたという⁽⁴⁾。これを地域社会の教養の向上に寄与した先進的な事績として、地元では公共図書館の先駆けと評している。

1-3 旅の記録と紀行文の執筆

政香は生涯に何度も遠路の旅に出ている。その目的は一樣ではないが、17歳の時に伊勢熊野へ出かけて以来、紀行文を残した旅だけでも6回になる⁽⁵⁾（表1）。

政香の紀行文の特徴は、何れも草稿を執筆した後で更に推敲や増補を加えた再稿や、三稿となる改稿本を執筆していることだが、そのような紀行文執筆への思い入れは、記録性にこだわった政香の一面を示してい

るようである。また、政香は前述の旧師に度々詩文や草稿の添削を願い出ており⁽⁶⁾、その添削結果を参考に言葉遣いや表現を推敲し、そこに新たな関連資料を参照して納得がいくように内容を充実させた改稿を行った。政香の著作で生前に刊行されたものはないのだが、一連の改稿は寺津八幡書庫での公開を意図したものだったとも考えられる。

添削を願い出た事例は、現在西尾市岩瀬文庫がウェブ上で公開している、同文庫所蔵の「古典籍書誌データベース」に掲載される政香著作の解題でも指摘されている。例えば、「拙稿」と分類された政香の草稿中には、師の山口凹巷が政香の詩を添削した跡がある他、「詩稿」「草稿」「文稿」「歌稿」などと標題が付けられている遺稿にも、特定はされない某氏による墨書や朱書の添削があることを挙げている。その内、「文稿」⁽⁷⁾には「本史料」の「序」に添削の手が入っていたことと、本文では「神通川舟橋」に関する部分での添削文が例示されている。試みにその部分の添削文を甲本と乙本の当該部分と校勘したところ、乙本にはその添削内容を反映させた表現が確認できた⁽⁸⁾。

表1 渡辺政香の旅と紀行文

年	年齢	期間	紀行文	目的・主な行き先
寛政4 (1792)	17	1/9 ~ 2/27	『西游藁』	寛政4年春、伊勢熊野、西国三十三所を廻る。詩歌が中心。旅の記録『西游藁』(初稿本)、のち改稿して同名の再稿本、三稿本をつくる。
文化元 (1804)	29	3/13 ~ 4/1	『都紀行』	漢文に詩歌が入る。京都、伏見、大坂、奈良、三輪、初瀬、吉野、伊勢を廻る。京都では叔父渡辺政喬の墓参。旅の記録『都紀行』をつくる。2年前に結婚した妻の寿賀との二人旅。この旅で寿賀も紀行文『道の記』をつくる。
文化9 (1812)	37	3/24 ~ 5/4	『浪華紀行』	東海道を經て大坂を廻る旅の記録。詩歌が中心。旅の記録『浪華紀行』(初稿本)、のち改稿して同名の再稿本、三稿本『浪華游藁』をつくる。
文政元 (1818)	43	6/12 ~ 6/28	『東游藁』	東海道を經て富士登山、帰路吉田から甲府、信州を廻る。詩歌中心。旅の記録『富士記行』(初稿本)、のち同名の再稿本、改稿して『東游藁』をつくる。
文政5 (1822)	47	6/9 ~ 7/3	『北游藁』	白山・立山を目的に、途中諏訪神社、善光寺など各地を参拝。詩歌や漢詩多数。初稿本『北游藁』(甲本)、増補した再稿本(乙本)をつくる。
文政6 (1823)	48	3/21 ~ 3/28	『遊勢南記』	途中の各所を参拝、旧師、知音を訪ねながら伊勢を参詣。旅の記録は『遊勢南記』(草稿)の後『遊勢南記』(清書稿)、改稿して『勢南記行』をつくる。

2. 『北游藁』について

2-1 書誌

「本史料」は渡辺政香が文政5年、47歳の時に6月9日から7月3日まで25日間をかけた旅の全行程を記した紀行文である。自筆稿本は寺津八幡書庫の蔵書であったが、現在は西尾市岩瀬文庫が所蔵する「寺津八幡書庫旧蔵書」に架蔵する。

「本史料」には、先に書かれた初稿本『北游藁 甲』(43丁。以下、甲本)と、それを刪補して内容が増えた再稿本『北游藁 乙』(59丁。以下、乙本)とがある⁽⁹⁾。両者の記載内容に大きな齟齬はないが、再稿本には初稿の内容を損なわない程度に表現を改めた部分、詩歌の添削や追加、帰郷後に道中で見聞した各所に関して資料を参照、引用した部分が見られる。内容の充実度から見ても、乙本は補足資料の活用、旧師等へ依頼した添削の結果を反映させた推敲を経たものと分かる。小稿では「本史料」全文の校勘は行っていないが、政香の思想や詩歌の創作意図に関する研究では必要なことだと思われるので、今後その分野での研究の進捗を望みたい。

巻頭には文政五歳の年号が入った漢文の序が付けられ、それに続く本文には毎日の行程を記した日記的記録、各地の名所や立ち寄って参拝した社寺の名称やその謂れ等の他、随所に漢詩や和歌が挿入されている。他には、訪れた各所の伝承や動植物に関する記述⁽¹⁰⁾も見られ、街道に沿って地誌や民俗、寺社の様子や安置する仏像等の所在を知る上でも貴重な資料である。

2-2 記述や書き方の特徴

個人的な金銭の支出控ではなく、訪れた各地の名所や風土を記録する紀行文としてまとめられており、全体からは神道や国学の教養に加え漢詩や和歌にも通じた、当時の文人・知識人による旅の実態が読み取れる。

序文は、記紀に遡って霊山登拝の歴史を概観した後、旅の動機につながる内容や、安寧な時代にあって自らが霊山を登拝できることへの感謝などが簡潔に綴られている。

本文はほとんど毎日、日付とその日の天気で書き始め、終わりは宿泊地を記入して一日を締めくくる記述のパターンを守り、各地での見聞に客観的な記録性を重視している。前述のように政香は三河地域の風俗・信仰・景観を、地域文化の記録として詳細に描写した著作を多数書き残しているが、紀行文の執筆でも、訪ねた土地の記載には同様の意図が感じられる。

それを裏付けるように、宿泊した各地の宿場だけではなく通過した街道沿いの地名、乗った渡し舟、越えた峠といった旅程を細かく記している(表2)。更に面白く思われたのは、立山山中は勿論、各地で道中の湧き水の在り処を頻繁に記録している点である⁽¹¹⁾。政香がこれを旅程に記すべき重要な情報と考えていたのであれば、各地で訪れた神社仏閣の謂われを細かく書いていることと併せ、今後旅を企図する人々を読者に想定した、旅行案内に類する意味も持たせていたのかもしれない。

その一方で、旅先で出会った人々、またその場所で感じたことなど、人についての記録や個人的な感想はほとんど見られない。見聞の記録を重視し、本文中で個人的な感想を加えることは控たようである。言ってみれば、随筆的(エッセイ)というより記録文学(ルポルタージュ)の感がある。但し、長い旅の中での個人的な感慨が一切省かれている訳ではなく、その時その場で感じた感想や感動は、幾つもの即興の和歌や漢詩にして頻繁に挿入し、表現している。

2-3 甲本・乙本に書かれた記載内容の差異

甲本と乙本を比べてみると、乙本では詩歌の語句の添削の他、新たな創作や削除が見られる。総じて甲本は行程記録が主であるのに対して、乙本は旅を通して関心の高かった部分に、新たな補足や詩歌を加えて情報量を増した内容になっている。

3. 文政5年の旅について

「本史料」の基になった文政5年の旅について、旅の動機を考察し全体の行程を整理する。

3-1 旅の動機

巻頭の序文は大きく3つの内容で構成されており、そこから政香の霊山への思いや旅を思い立った理由の一端が読み取れる。

この旅では各所で幾つも神社仏閣に参拝しているが、政香は日本の霊山に憧れを持ち、殊に富士山・立山・白山の三霊山には強く思いを寄せていたことが窺える。(以下、下線はすべて筆者)

①皇国大嶽之中富士立峯白山歴世遼邈而尤峻秀也。然上古未曾聽跋涉者、②漸至大宝年間而得役居土攀富頂佐伯有頼登立峯泰澄窮白嶺矣。(甲本 序)

ここでは、下線部①で富士山、立山(立峯)、白山の美しさ雄大さを称賛し、下線部②では、それぞれの

山を開いたと伝承する役行者（役居士）、佐伯有頼、泰澄の登山を挙げている。何れも7世紀末から8世紀初頭のことと伝えられるもので、古くから宗教的な開山を経た霊山へ登ることへの特別な意味を強調しているようである。

そして、その後は長く霊山への登拝が行われなかったことを遺憾としている。

皇国之靈嶽道尚茅塞而歴数千歳矣、可謂遺憾之甚歟（甲本 序）

江戸時代になると社会の安定から、修験者だけではなく山好きの文人墨客も富士山、立山、白山への登拝を憧憬するようになった。その文脈の中で、池大雅たち3人が三霊山へ登拝したことを特記して意識している。

③近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年有三岳之遊（甲本 序）

政香は、この旅の4年前文政元年（1818）に富士山へ登っており、この年の旅の主目的は立山と白山の禪定登山であったが、旅の動機と池大雅の「三岳之遊」は無関係ではないように思われる。

池大雅は寛延元年（1748）7月に富士山へ登り、翌寛延2年（1749）5月には高芙蓉（孺皮）とともに白山と立山に登る。これにより三霊山すべてに登拝したことで、大雅は「三岳道者」と称した。更に宝暦10年（1760）には高芙蓉と韓大年の3人で7月3・4日に白山、7月13日は立山へ登り、その後戸隠、浅間山を経て8月22日には富士山に登っている。苦行とも思える2か月半の非常にハードな日程で三霊山を一気に登拝した後、同行した高芙蓉と韓大年もまた「三岳道者」と称した⁽¹²⁾。下線部③は大雅たち3人の宝暦10年の旅を指すものだが、乙本ではそれに続けて加筆（下記ゴチック部分）があり、そこからは大雅たちが三禪定を成し遂げ「三岳道者」と称したことを知って、政香は心が穏やかではなかったニュアンスが窺われる。

近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年有三岳之遊、因号三岳道者唯竊惜其跡、④雖奇其文未題亦未聞紀行及吟咏流播於無者也（中略）従未有遠游之癖、⑤粗窮東西之諸勝、未至北陸居諸荏苒遍知命之年矣。（乙本 序）

この大雅たちの三禪定が、この時の政香の旅立ちの動機に影響を与えていたと見てよいだろう。ただ政香は、大雅がそのときの登山を『三岳紀行』に書いていることは知らなかったようである。下線部④を見ると、政香は大雅の旅を念頭に置きつつ、霊山を巡りその記録をきちんと残す紀行文を執筆する意思を強くしたものと推察される。

政香が住む三河や尾張は三禪定の習俗が集中する地域であり、「本史料」の行程を見れば、足を延ばせば同時に富士登山も可能だったと思われる。しかし序文からは三禪定の習俗に見られる根強い苦行性への共感は見られない⁽¹³⁾。その上で下線部⑤を見れば、このときは三霊山の巡詣への思い入れよりも、各地の寺社を参拝し名勝を巡りつつ北陸を訪れることが主目的であり、しかも富士への登拝は既に終えていたことから、敢えて一度に三霊山を巡拝する習俗には拘りを持たなかったのかもしれない。

3-2 行程

行程を整理すると、訪れた土地や拝観した神社仏閣が丁寧に書かれていることが分かる。ここからは、各地での見聞記録は客観的に、また訪れた寺社で知った謂れや土地の習俗は、精力的に記録していると感じられる。

表2は「本史料」に見える主だった地名と訪れた見学先、参拝した寺社などを挙げたものである。ただ訪れただけでなく、神職として潔斎する意識もあったからか、矢作川（6月9日）、白山の川や滝（6月13・14日）、加えて立山では称名川（6月20日）でも身を清めている。垢離は禪定途中の習俗としては珍しくなかったのかもしれないが、立山での垢離を記録した「立山紀行文」は、「本史料」の他に後述する3

件が管見される。

表2 『北游藁』に記された旅の行程

<p>凡例 〈 〉は主な見物先、【 】は訪れた主な神社仏閣等。ゴシック部分は立山の旅程で、小稿での翻刻、分析した部分で、次章以下に詳述する。() は行動や場所などの補足。名称は現在の地名になおした。</p> <p>6月9日 寺津村発—中畑(矢作川で禊)—刈谷—〈桶狭間〉—松—鳴海【成海神社】—〈戦人塚〉—宮泊 10日 宮—熱田【熱田社・境内末社】—【高座結御子神社】—【大龍寺五百羅漢堂】—小牧—犬山泊 11日 犬山—【寂光院】—栗須—【新長谷寺】—立花—須原泊 12日 須原—千虎—郡上八幡—剣泊 13日 剣—白鳥—【長瀧寺】—〈阿弥陀ヶ瀧〉—石徹白—【白山中居神社(神前の川で垢離)】—石徹白(社人宿坊)泊 14日 石徹白—【白山参詣(泰澄大師像拝観・市ノ瀬の滝で垢離)】—白山室堂泊 15日 白山室堂—高天原—【御前峯奥宮】—市ノ瀬泊 16日 市ノ瀬—牛首—木滑関所—木滑—吉野泊 17日 吉野—鶴木—小柳村—額谷—金沢〈金沢城下〉—金沢泊 18日 金沢—津幡—【俱利伽羅不動寺】—【埴生護国八幡宮】—石動—高岡—小杉泊 19日 小杉—桜谷—〈五百羅漢〉—神通川舟橋—富山〈富山城下〉—大森—岩嶺寺—芦嶺寺(泉蔵坊)泊 20日 芦嶺寺—立山山中各所—室堂泊(参籠) 21日 室堂—立山山中各所—芦嶺寺(泉蔵坊)泊 22日 芦嶺寺—下田—森尻—滑川—魚津泊 23日 魚津—持光寺—三日市—【徳法寺(親鸞上人腰掛石・手植柿木)】—〈愛本(刎橋)〉—泊—市振泊 24日 市振—親不知・子不知—駒返—犬尻—風波—外波—青海—姫川—寺島—糸魚川—鬼伏—能生(船中) 25日 五智—高田—新井—関山—関川—野尻—柏原泊 26日 柏原—【戸隠大明神】—平出—吉—上野—丹波島—善光寺泊 27日 善光寺—【善光寺(朝開帳参拝)】—中御所—塩崎—〈姥捨山(冠着山)〉—猿ヶ馬場峠—麻績—青柳—法橋泊 28日 法橋—立峠—会田—刈谷沢—松本—塩尻—【小野神社・弥彦神社】—【祭林寺】—【諏訪神社】—南小野泊 29日 南小野—新町—伊那部【常圓寺】—飯島泊 晦日 飯島—七久保—座光寺—飯田—大沢—大野泊 7月朔日 大野—浪合【浪合神社】—月瀬—杣路峠—武節—蓮谷泊 2日 蓮谷—上垣内—足助—桑原【龍溪院】—【岩津天満宮】—【伊賀八幡宮】—岡崎泊 3日 岡崎—【六所神社(遙拜)】—寺津村帰着</p>
--

4. 文政5年の旅で訪れた立山山中の各所

「本史料」に書かれた立山禅定登山の行程に沿って、通過した場所や山中の様子、そこにまつわる説話などから特徴的な部分を引用し、他の「立山紀行文」等での記述と照らすことで「本史料」の資料的な特徴を浮かび上がらせ、具体的な山中の実態を整理する。

4-1 立山での具体的な行程と行動

(1) 1日目(6月19日)

—富山城下—大森—岩嶺寺—芦嶺寺—【嬬堂】—泉蔵坊泊

①大森

政香は小杉から富山城下へ入り舟橋を渡り昼食を済ませ、中市から流杉方面を通り、大場から西大森へ常願寺川を渡り岩嶺寺へ向かったと見られる。

その途中で見つけた「渡過道」と彫られた大きな碑が倒れていたのに関心を持っているが、この碑の存在については他の「立山紀行文」では管見しない。いつかの時点で水害などにより転倒していたのかもしれない

い。道標とも思われるが高さが八尺は大き過ぎるようでもある。

田中二自然石の大碑八尺余あり、田中倒れ伏せり。渡過道の三字斗りみゆ、何人の碑なるや知難し(甲本)

②岩嶽寺

岩倉寺では立山権現を参拝しており、境内地にあった堂舎の名称を詳細に記録している。

岩倉村立山権現の別当にして坊舎二十四坊あり、本坊を岩倉寺という。神明 天神 八幡 若宮 岩崎 新宮七社あり。(甲本)

甲本ではこの記述箇所の上部余白に「岩嶽寺／社領五十石／別当天台宗／妻帯」と書き込んでいるが、この部分は乙本では本文中に加筆されている。

続けて、岩嶽寺に関わる長文の開山縁起を書いている。この部分は、岩嶽寺で刷られた登山案内図(「越中国立山禪定名所附図別当岩嶽寺」。以下、山絵図)の記載を、ほぼそのまま引き写したものである。これ以降の記述でも禪定道に沿った山中の地名や堂舎の名称、堂舎の大きさや山中の距離などは大部分が山絵図の禪定道案内と一致、または類似することから、政香がここで山絵図を入手し途中や帰郷後にも目を通していたことは明らかである。

この旅の途中では熱田や白山、諏訪、善光寺などでも参拝した寺社の由来や縁起に相当する長文の記述部分が見られるので、立山以外でも同様に地元の史料からの引用があるものと推定される。

立山大権現ハ伊弉諾伊弉冉の霊体一切男女の元神にて此峯を城都として上下人の父母なる故に邪正ともに利益す、謂る越の大宮なり。四十式代聖皇文武神託によつて①佐伯有頼公を越の領主に下し玉ふ。二神わさと鷹に化現して②嫡子有頼を峯中に引入す。則玉殿岩屋の内にして先代祖々の法を受持し頓悟す。依て慈興と称し中興の開山なり、大宝元年に別当岩嶽寺を立、又四月八日に権現告て曰灵天ニハ峯に住し龍花会を待、天上にハ此処に住してそつ寂光を守る。是垂後の地なり。諸堂精舎を造立し、毎年此日祭礼修行なすへしと云云。今ニ七社の神輿をすへ樂者を揃へ児の舞法華問答あり。此山の地主ハ手力雄の尊なり。天平七年行基菩薩此峯によちのほり諸嶽を拜し、岩倉寺五智の尊像を造立し講堂に安置し玉ふ。(甲本)

下線部①に「佐伯有頼公」とあるのは、下線部②「嫡子有頼」と対照させたとき、開山説話の内容から考えて「佐伯有若」と書くべき点であろう。しかし、ここでの記載は政香の錯誤だったとも言い切れない。山絵図には、芦嶽寺との争論の反映や制作された時代の違いなどで、刷られた縁起の内容に微妙な移動を含む複数の版が存在するからである。そこで立山博物館と富山県立図書館が所蔵する山絵図10点の縁起部分を校勘してみると、当該部分の記載にはそれぞれ[有若・有頼]、[有頼・有頼]、[有 公・有頼]のバリエーションが存在する⁽¹⁴⁾。後述する芦嶽寺の嬬堂についての記載と併せて、政香が入手していたのは[有頼・有頼]とある版で、そこから引き写していた可能性が高い。

③芦嶽寺

芦嶽寺では泉蔵坊に宿泊している。国別の配札先では三河を檀那場としていたのは善道坊だが、嘉永3年(1850)分の善道坊の檀那帳では、配札に訪れた村146ヶ村に政香の住む寺津村の名前はない。三河や駿河は立山信仰が盛んな地域でもあり、善道坊ではなく泉蔵坊と関係を持っていた可能性も考えられる⁽¹⁵⁾。

また下線部の「蚊帳を止む」といった蚊帳の記述は政香のこだわりのようで、「本史料」では立山に限らず多くの宿泊地で書かれている習慣的な表現である。

坂を越へて芦倉村ニ到り泉蔵坊ニ舎る、蚊帳を止む (甲本)

④布橋・媯堂

その日のうちに媯堂を参拝している。『三の山巡』には「立山へ参詣のもの先ヅ此媯堂へ詣、此所にて色々教化いたし候事也」とあるので、政香も禅定登山の前には媯堂で媯尊の由来や信仰上の説話などを聞いていたことと思われる。政香はそこで媯尊について記紀との関連に興味を覚えたようで、「本史料」には他の「立山紀行文」では管見しない部分が含まれる。

媯堂前の橋を浮橋という。橋の数板の数欄干ニ到る迄皆諸仏菩薩の員数法華經の文字ニ合せて架すという。橋本に拾抱余の杉四五本あり。①媯堂中尊ハ沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊なり、此山へ天降り玉ふという。其外六十六ヶ国の媯御前の像あり、②或説に有頼公の母上像なりともいう。大宝三年八月十二日忌日なる故毎年秋の彼岸の中の日_に供養あり。(甲本・乙本も同意)

媯堂内の媯尊は本尊が3体、その他に日本66州にあわせて66体の全部で69体ということ、他の「立山紀行文」で数を挙げて記録しているものは管見しない。「本史料」では数字を挙げている他、下線部①で本尊3体の由来を、立山へ天下った沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊としていること、また下線部②では佐伯有頼公の母という説を併記して媯尊の来歴について複数の解釈を記している点は興味深い。

「本史料」で媯尊の由来とする沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊は、ともに『古事記』や『日本書紀』に記される日本神話では、天地開闢の後に誕生した神々の世代「神世七代」の女神たちである。沙土煮尊はその第三代で、後世では土壌や農耕の神としても信仰されることがあるという。また大戸辺尊は第五代で、大地が完全に固まった状態を神格化した存在、そして惶根尊は第六代で、世界の秩序や人間の完成された姿を神格化した存在とされる。

芦峯寺での媯尊の来歴は、時代によって柔軟に解釈を加えながら変遷している。古くは延宝3年(1675)の「加越能社寺来歴」では「御姥本尊之内一尊ハ文武天皇之御収影又ハ天津彦火瓊瓊杵ノ御尊供あがめ奉り、一尊ハ伊弉諾命、一尊ハ伊弉冉之命、以上三尊おかりに御姥与名付奉り惣して六拾六尊御座候」としていた。その後、記紀に現れる女神沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊が持つそれぞれの神格とのつながりは、本地仏と習合させ縁起に記載して定着させると共に、天地開闢や瓊瓊杵命降臨の神話などをモチーフにして媯尊を独特に神格化させていったものようである。文化3年(1806)に加賀藩寺社奉行へ提出した「立山芦峯寺由来帳」では「立山中宮芦峯寺媯之三尊ト申者、一尊者、娑栴根命、一尊ハ大戸間辺命、亦一尊者、堅惶根尊、則、天神七代之御神ニ而」、また文化13年(1816)の「立山略縁起」では「立山御媯三尊ハ、右の御手に五穀を納、左之御手にハ麻之種子を執持し、則、越中立山芦峯に天降たもう」ともある。

そして立山一山会文書「芦峯中宮寺媯尊大縁起」⁽¹⁶⁾(文化14年<1817>)を見ると、3柱の女神たちは仏と習合し「左之御手ニ納五穀、右手者麻之種子執持、刀利之雲分来、(中略)天神七代尊、一体分身、以媯形現三体之尊像、先一尊者不動明王、惶根命。一尊者金剛界、大日之垂迹、大戸間辺命。亦一尊者胎蔵界之大日、娑栴命、都合三仏」となる。但し、泉蔵坊に伝わる異本「芦峯中宮御媯尊縁起」⁽¹⁷⁾(天保2年<1831>)では、同じ部分は「左ノ御手ニ五穀ヲ納メ、右ノ御手ニ執ニ持シテ麻ノ種子ヲ、(中略)天神七代之命ト、此ノ所ニ一体分身シテ、而以テ媯之形ヲ現ス三尊之体ヲ、沙土煮尊・大戸辺尊・惶根尊是也」とあり、仏と習合された内容は見えない。国学を学び記紀に造詣が深い政香が、媯堂を参拝して泉蔵坊へ宿泊したことに鑑みると、習合せずに媯尊と日本神話の神々と結び付けている泉蔵坊の異本の内容に基づく説話に興味を持ち、それを特記したと想像される。

そして、下線部②は、並行して芦峯寺に伝わる「有頼(慈興上人)が母を偲んで彫った像」という伝承を異説として同時に聞いていたか⁽¹⁸⁾、或いは、岩峯寺で入手した山絵図に書かれたものを見てその話を知ったものと思われる。岩峯寺の山絵図の中に「阿しくら媯堂ハ佐伯有頼公の母の像大宝三年八月十二日忌日なるゆへまいねんあきの彼岸の中日に供養をす」という文言の入った版の山絵図⁽¹⁹⁾も存在しているので、記述がもし山絵図に基づくものであったならば、政香が入手していた山絵図の版は限定されてくるだろう。

(2) 2日目(6月20日)

芦峯寺(泉蔵坊)－嬬堂－藤橋(称名川で垢離)－小金坂－千寿ヶ原【千手堂】－熊野権現－材木坂－餓鬼が首－鷲が窟－美女杉－ぶな坂－だんさい坂－【不断光仏】－禿杉－伏拝(称名滝)－かりやす坂－桑谷－【桑さき観音堂】－【不動堂】－姥石－上野－二の谷・小鎖－一の谷・大鎖－獅子が鼻窟－ささ峠－畜生原－鏡石－小杉谷下市場・上市場－地獄谷追分－室堂平(室堂)－地獄谷(百三十六地獄廻り)－室堂泊(参籠)。

禪定者は、仲語に案内され禪定道を通して立山へ登るが、当然各々の興味関心が違うため「立山紀行文」に書かれる地名の粗密やその表記の揺れ、また、各所にまつわる諸説話、堂舎や石仏の有無などの記述は一樣ではない。しかし、その理由は当事者による印象や記述の選択だけではなく、嘗て有った堂舎が登った時点では既に無くなっていたなど環境の変化による理由の他、道中の案内についての仲語の説明にも理由もあったように思われる。

道すがら仲語たちが語る立山の様々な伝承が必ずしも一樣ではなかったのは、定本のテキストが存在しないので当然であろう。その他にも登拝当日の山中の状況や悪天候などのコンディションもまた、仲語が語る内容を左右したに違いない。そして内容などは先輩者からの口伝であり、実際には語る仲語の数だけ内容や表記のバリエーションがあったと想像される。岩峯寺で作られた山絵図には地名と極簡略な伝承が載せられてはいるが、近代以降に活字化されて拡散した内容は、採話された幕末時点に定着していたものであり、そこに到るまでは、細部で任意の解釈が加えられて変化していった余地は多い。言い換えれば、立山禪定道の説話は場所に付いて存在すると同時に「人」に付いて伝承している訳である。

表記の解釈について具体例を挙げれば、「しょうみょうだき」は現在では「称名滝」と漢字を当てるのが一般的だが、「立山紀行文」や山絵図では表3のような多様な揺れが見える。慣例的に、名称と「滝」の間に「の」や「が」など格助詞を挟む慣習の有無は措くとして、聞いた者は「ショーミョー」という音に様々な字を当てて理解していたからであろう。仲語が伏し拝みで滝の名の由来を「落ちる滝の音が、南無阿弥陀仏の称名を唱える声に聞こえた」という説話で語っていたとすれば、それを聞いた者はその発音から「称名」の語を理解していたり、或いは仏教的な雰囲気から勝妙や正明などの字をイメージしたりして揺れが生じていくのであろう。

ただ、「称名」と書き「ショーミョー」と読んだのであれば、仮名遣いの原則に従うと「しょうみやう」と表記すべきである。この点で、仮名遣いについては芦峯寺系と岩峯寺系の山絵図ではそれぞれ表記が異なっていた点を指摘しておく。芦峯寺では「せうめう」と書くので、仮に「ショー」に漢字を当てるとすれば「せう」には照や詔などが、一方岩峯寺では「しやうめう」と書いているので、「しやう」には正や声、唱、庄などを当てていた可能性が考えられる。そして「ミョー」は「めう」と共通するが、漢字にすれば名や明ではなく、妙が当てられて然るべきであろう⁽²⁰⁾。

現存する版を管見した限り、各々で改版した際にも仮名表記は変更されず、ほぼ踏襲されている。この違いは、単に原則に構わず当てたものとも思われるが、それぞれの村が別々に滝の名称を解釈していたのか、或いは両村の宗教的利権に関連して敢えて変えていたのだとすれば、その背景には興味を持たれる。

①藤橋(称名川で垢離)

「称名滝」の表記に揺れが多いのに対して、「藤橋」の表記では管見したほとんどが漢字で書かれ、揺れがない。遠景を遙拝するしかない称名滝に対して、実際に藤蔓で架けた橋を渡りはっきりとモノと名称が一致して印象付けられることも関係しているように思われる。

藤橋を渡った後、政香は立山権現への参拝を前に称名川で身を清めたことを甲本に書いている。

藤橋を渡り称名川にて垢離す(甲本。乙本では削除)

前述のように、政香はこの旅の途中では何回も身を清める敬虔な態度が窺えるが、乙本では垢離を取った記述は削除している。

この他にも『和漢三才図会』、『立山道名所』⁽²¹⁾に称名川で垢離を取ることに触れた箇所がある。

また、十返舎一九も立山を訪れているが、その時の見聞をモチーフに書いた『越中立山／参詣紀行・方言修行金草鞋』（文政11年〈1828〉刊）にも垢離を取ることに触れた箇所がある⁽²²⁾。ストーリーは戯作の形をとっているが、立山山中の地誌はかなり正確に描写してある。

『立山道名所』の筆者自身や十返舎一九が実際にここで垢離を取ったか否かは不明だが、ここが禪定途中で身を清める場所として認識されていたことは分かる。

渡_ス藤ノ橋_ヲ行人取_ル垢離_ヲ処（『和漢三才図会』）

此河照名川と云。爰ニテこりお（垢離を）取所也（『立山道名所』）

それよりゆ川（湯川）、しやうめう川といふ、とうざんの人こりを（登山の人垢離を）とる所也（『越中立山／参詣紀行・方言修行金草鞋』）

②千寿ヶ原から室堂まで

「本史料」では、藤橋を渡った後の禪定道に沿って山中の地名や堂舎の名称、また大きさや山中の距離などを細かく記している。これも岩峯寺で刷られた山絵図の禪定道案内を基にして実際の見聞も加え、特に興味があった場所には内容を補足したものになっている。

こかね坂、せんじゆ原、せんじゆ堂あり。是より美女杉迄一里、①此間に熊野権現の社あり。

②昔材木拵へ所へ女人来る故材木石になる、以立積ミ横積ミの形なり、是を材木坂という。かきか首、又鷲の岩屋あり。③若狭国長良の尼の下女美女杉となる。㊦七度浮橋の用木となりて成仏せんと誓て伐迄ハ芽を生して大木となり、七度目に枯たり。今は切株はかり也。此処水なし。ふな坂まで一里此間に④しかりはりという穴あり。右の尼かふるをしかりなから小便するに、ならくまで穴通りしとなり。たんさいのみさかと云坂あり。ふたんくはう仏ちんざ、かふる㊧かふる杉となる、廻り八尺斗り高さ三間四方にたれてしなり、廻り三十間はかりあり。ふな坂よりくわ谷へ一里此間左ニ称名滝を拜、ふしおかみという。かりやす坂、くわ谷此所に室あり。清水あり、昼飯を喫す。不動堂まで壱里此間にくはさき観音堂あり。不動堂ハ弐間に三間なり。堂より右十間斗り往て水あり。追分迄一里此間に湯道あり、松尾越という。阿弥陀原薬師如来なり。右ハ姨がふところ道、⑤右の尼、石となる女人の形あり。左ハ一の谷道のほりハ此道を往き下向は姨かふところを下る也。上野迄一里此間に二の谷小鎖、一の谷大鎖あり。三条小鍛治宗近が作という。獅子か鼻の岩屋弘法大師こま修行の灰あり。さゝ峠坂の左の方畜生原、此処にふしきの牛馬を見る事多し、面ハ人間にして四足あり。⑥下市場迄一里此間に鏡石あり。右尼姨かふところにて権現に鏡を上るに石となる、弐間四方あり。小杉谷下市場上市場あり。聖霊市をなす故に市場という。左は大日か嶽右は国見か嶽此間に横渡りという処、雪の上五丁はかり往く、かんせきの谷なり。不信心の者畜生出て通り難し。地獄谷の追分あり。右は室堂道なり。左は地獄道高塔婆という処に塔婆あり。右の山ハ大天狗小天狗の御在所なり。室堂弐軒、⑦四間二五間余なり。（甲本・乙本とも、挙げられている地名は同じ）

○熊野権現

熊王権現の社（熊王権現堂）は、がきが首という場所にあり、昭和5年（1930）の国土基本図に記された尾根道とは別の南斜面をつづら折りに折れに登る道で、現在地とは違い尾根にあったようだ⁽²³⁾という。政香が見た状況は、まだ旧道の様子が残る明治34年（1901）に浅地倫が登った記録にある「岩窟の祠のあ

る所に出づ窟内熊王権現を祀る」⁽²⁴⁾とさほど変わらなかったのではないかと思われる。政香はここを下線部①のように「熊野権現の社」と書いているが、管見する「立山紀行文」では「熊尾権現」（『道中日記』⁽²⁵⁾）、「熊負権現」（『三の山巡』）と書かれたものなども見られる他、山絵図には「くまをちんざ（鎮座）」とある。これらの表記から総合すると、衆徒や仲語はこれを「クマオー」と呼び、通常は「熊尾（くまを）」と表記していたのではないかと思われる。もし「熊王」とするなら「くまわう」と書かれる筈だからである。

ここには修験者の修行、また有頼開山説話に関係した説話が伝えられる。要約すると、「慈興上人が立山を開くためにこの地に差しかかると、第六天魔王が眷属を連れて現れ、難題を持ちかけた。しかしどこから小山大明神や熊尾権現の使者が熊になって現れ、魔王は降伏して姿を消した。そこで熊尾権現の使者になった熊をこの地に祀った」⁽²⁶⁾というものである。

この説話からは、正式に熊野神を勧請したものではなく、修験・熊野信仰・開山縁起の熊説話などが基になって立山で語り継がれた地元神ではないかと推察される。ただ、仲語によっては案内の際に修験や熊野信仰との関連を強く語った場合もあったのかもしれない。「立山紀行文」に見える表記の揺れは、仲語の話を聞いていた登拝者が「くま・の」「くま・お」「くまおう」などと耳で聞いたまま記載し、そこに『和漢三才図会』などにある「熊野権現」の記述が干渉していたり、熊野信仰との結びつきをイメージしたりして理解していた場合もあったと思われる。

○材木石・材木坂

材木坂は、その場所を通ればいつでもはっきりと対象となるモノが見えることや、山中各所にある女人禁制の伝承と親和性が高いため、印象に残りやすい場所であろう。「本史料」下線部②の記述は山絵図から引き写されたものだが、女人の正体も、神罰を受けた理由も特定されていない。しかし『三の山巡』では「何とか云尼僧登り来て御山を穢せしゆへ一夜の内に石になりしといふ」とあり、美女杉や禿杉、姥石や鏡石の神罰とつながりを持たせている。

○美女杉

女人結界を犯した尼僧が杉に変えられたとするのは、岩嶽寺に伝えられた説話である。『和漢三才図会』では既に「若狭小浜ノ女僧名_ニ止宇呂_ノ尼_ト者」とあるのが原型と思われるが、下線部③の記述とその引用元になった山絵図では「若狭国長良の尼の下女」とある。『和漢三才図会』の記述が岩嶽寺の衆徒に取材して記載された⁽²⁷⁾と見られるものなので、岩嶽寺では若狭の止宇呂尼と長良の尼の名は揺れながら並行して語られていた時期があったと考えられる。

それに対して、芦嶽寺では開山堂に慈興上人像を祀り開山廟を置くからか、岩嶽寺と異なり姥石や美女杉にも開山説話と有頼（慈興上人）の生涯を絡めた説話が多く伝承する。

芦嶽寺では立山信仰のアイデンティティとしての佐伯有頼にまつわる内容として、また岩嶽寺では女人禁制が色濃い全く異なる内容の美女杉説話を並行して伝承してきたが、明治以降活字になった時期と採話された経緯から、現在では女人結界を犯し杉に変えられた尼僧の話が広く流布している。

但し、芦嶽寺で伝承する佐伯有頼にまつわる説話の中でも複数のバリエーションが見られる。

例えば、佐伯幸長氏（芦嶽寺大仙坊後裔）が自著⁽²⁸⁾の中で紹介している説話である。以下に要約する。

「美女杉説話 1」

有頼には美しい許嫁の姫がいたが、立山で修行して何年も帰らなかったため、姫は「有頼の側で困苦を共にしたい」と思い、乳母とともに立山へ登った。しかし急峻な山道で動けなくなり、途中にあった行者の臥小屋で有頼の下山を待つことにした。乳母は、その姫の思いを有頼に伝えようと、女性の魂と言われる「鏡」を持って一人で山を登ったが、弥陀ヶ原から畜生が原に至る谷間で動けなくなった。乳母はその場で息絶えて石になってしまうが、その間に「有頼に姫の心を伝えよう」と、持ってきた鏡を

投げるとそれが鏡石となった。やがて有頼は山を下り行者の臥小屋で待つ姫と会うが、姫を哀れと思いつつも愛着の心を断ち切り、下山させた。そこで姫は山を下る途中で一本の杉の若木に向かって有頼との再会の日を祈った。杉は健やかに育ち、後にこの杉を美女杉、その一帯の高原を美女平と呼んだ。またこの姫を杉姫と呼んだ。

「美女杉説話1」は、立山開山にまつわる、女人禁制とは関係しない杉姫の説話である。佐伯幸長氏はこの話は父から口伝で聞いたとしている。

これとは別に、佐伯立光氏（芦峯寺泉蔵坊後裔）が自著⁽²⁹⁾で紹介する説話を以下に引用する。

「美女杉説話2」

昔、有頼の継母藤波という人が、美人の侍女を引き連れてこの地へ参りますと、a 侍女の一人が慢心を起し、かつて材木坂で山住の神の怒りに触れて材木を突崩されたが自分らの身には少しの災もなかった。この山は、女人禁制の山と称するけれども何事に祟あらんと思うに、忽ち一天かき曇り震動雷動して侍女の五体は立ちすくみ、やがて総身が焰となって一步も進むことができなくなりました。その時はじめて侍女は仏心を起し、死期に近づいていうには、b 私は一本の杉となり、麓天の浮橋に七度まで掛変って成仏すると遺言し、姿が消えました。c のち天の浮橋が七度の掛け変えを終えたのを機会に、再びその地を訪ねてみますと、不思議やd 侍女の姿が消えた場所には、一本の杉の木が生へ繁(マツ)っておりまして。美女の侍女が一本の杉の木に化したところから、美女杉と名づけられている。

「美女杉説話2」には2つの特徴が見える。1つは、下線部aのように「材木石」に関する説話と連動するような関連を持たせ、材木が石に化す原因を作った別の侍女を設定している⁽³⁰⁾ことである。美女杉になった侍女は、材木石の原因を作った別の侍女には直接神罰が下らなかったことを知っていたので、慢心して故意に女人結界を犯すという展開になっている。

もう1つは下線部b、cで天の浮橋（布橋）の掛け替えが美女杉説話のプロットに加えられていることである。

「本史料」の波線部Aにある「浮橋の用木」とした話は山絵図には無いので、政香が仲語や芦峯寺の衆徒から聞かされた内容が元になっていると思われる部分である。ここからは七生には輪廻思想が、また天の浮橋（布橋）は芦峯寺では重要な宗教施設であることから、その用木となる功德で成仏できるというような考え方があったこと、そしてそれが七度目で成仏したというストーリーで構成されていることが分かる。しかし細部を見ると、下線部dでは成仏した後に「美女杉」となって繁り続けたのに対して、「本史料」の波線部Aでは「七度目に枯たり。今は切株はかり也」と変化している。つまり政香が見たのは既に枯れた後の株だった訳だが、これは美女杉が枯れてしまった後の切株に対して、あたかも成仏したから身体（幹）は枯れて姿が消滅してしまったと言うかのような、辻褄を合わせるために手を加えたバリエーションもあったであろう。

美女杉はいつの時点で枯れたのか明確には分からないが、枯れた後もずっとその付近で切り株を指して説話が語られていたものと思われる。「立山紀行文」から時系列に美女杉枯死の記述を拾うと、『三岳紀行』（宝暦10年）「美女杉ノかふ（株）有」、『立山ノ記』（文化9年〈1812〉）「美女杉、今已ニ稿死ス」、『本史料』（文政5年）は「今は切株はかり也」。その後は、『三の山巡』（文政6年）に「美女杉 今は枯れしよし」、『立山道の記』⁽³¹⁾（天保12年〈1841〉）「美女杉ト云、今ハ枯テナシ」、『立山遊記』（天保15年〈1844〉）「美女杉ノ大木ノ根アリ。二三十年前に枯レタリ。今ハ根朽ちタリ」と続く。管見した限りでは宝暦10年が最も古い記録で、18世紀半ば頃までには既にモノとして美女杉はなかったと推察される。

また、美女杉の枯死に関連して、「本史料」の波線部Aに「伐迄ハ芽を生して大木となり」とある部分との関連が窺われる立山曼荼羅がある。「立山曼荼羅立山博物館日本」では、美女杉は他の絵とは異なり「びじよ

う杉」と書かれた左側に、折れた切株の右脇から枝葉を繁らせる杉を描いている（写真1）。これは、杉の木に女性の顔を付けて描かれる「記号としての美女杉」の作画ではなく、切株になっていた当時の杉を実際に見て描いていたものではないか、とも考えられている⁽³²⁾。

○しかりばり

しかりばりの説話は、比較的多くの「立山紀行文」に書かれているが、小便をしたのが尼であったり、禿の失禁であったり、口伝の中でその理由が揺れる⁽³³⁾。山中に存在する底なしとも思われる不可思議な大穴はイメージーションを刺激するものであったのだろう。しかし現在の場所は不明である。山中の考古学的調査では、現在は有料道路の下になってしまった風穴と見られる、としている⁽³⁴⁾。

○姥石・鏡石

「本史料の」下線部⑤⑥に書かれる姥石と鏡石にも、芦峯寺と岩峯寺では異なる説話が並行して伝承している。広く知られる女人禁制の中で語られた姥石の説話は『和漢三才図会』にも見られる。一方芦峯寺に伝承するものは、前述の「美女杉説話1」に見える有頼の許嫁の乳母が石に化すもので、女人禁制とは無関係である。鏡石は女性が持っていた鏡が石化した点では共通するが、芦峯寺の説話では、やはり女人禁制には結び付かない。

このように、同じ語を両村が別の意味で解釈し、異なる説話を伝承している事例は、ここに限らず佐伯有頼の開山説話の中にも見られる⁽³⁵⁾。ここでは、「うば」を芦峯寺では「乳母」に、岩峯寺では「老婆」と解釈して別々に創作されたものと考えられる。岩峯寺では、大峰山の都藍尼、高野山の石童丸の説話など各地の説話との類似性⁽³⁶⁾から見て、「老婆」に、山と女人禁制の範疇で「とうろ」の名から人物像を創作し、美女杉や禿杉と同様の一連のストーリーとして語られてきたのではないかとと思われる。

○室堂

「本史料」の下線部⑦は山絵図からの引き写しだが、政香が式軒と書いているのは実際に泊った体験に基づく。山絵図には3棟と書かれ立山曼荼羅にも3棟が描かれているものはあるが、現存は2棟である。『和漢三才図会』には「室堂 四間五間三棟」とあるが、歴史的には棟ごとに何度か建て替えながら段階的に3棟となり、文政頃には1棟を廃止して2棟になったという⁽³⁷⁾。政香が登ったときには2棟で運用されていたということである。そして、登山人数が減る要素はないのに2棟に減ったことと、天保期の「立山紀行文」には、室堂の環境が劣悪であった記述が集中して見られる⁽³⁸⁾ことは、無関係ではないだろう。

○地獄谷（百三十六地獄廻り）

禪定登山では翌日早朝に御本社へ参拝するので、着いた日は地獄廻りの後、室堂に宿泊する。

地獄谷の光景やみくりが池の光景に地獄廻りで見聞した感想を添えている「立山紀行文」は多いが、「本史料」では個人的な感想は述べられていない。賽の河原からみくりが池、血の池を描写しそれを地獄廻りの最初と最後としているが、その他には具体的な地獄の描写もない。

地獄廻り最初さいの河原八寒地獄は大池なり。雪解の水漕り落つ、水色藍の如し。夫百三十六地獄を廻り終二血の池あり。女人成仏の為に血盆経を池中に納む。廻り終りて室堂二歸り此夕室堂に籠る。（甲本）

地獄に関して乙本では、これに続けて『婆沙論』を引用した補足を加筆している。

婆沙論二南瞻部州下過五百由旬、乃有其獄有大有小大則八寒八熱小則一々大獄四門各有四、小獄共為十六小獄云云。八大地獄に各有十六別処共百三十六地獄也（乙本・加筆部分）。

この加筆は、甲本では上部余白にメモ書きされており、乙本で本文に入れている部分である。

下線部に「百三十六地獄を廻り」としているが、実際には立山山中でその全てを1つ1つ見て回る訳ではないので、政香は136の地獄があること自体に興味、或いは疑問を持ち、帰郷後に經典に当たって補足した部分のようである。

(3) 3日目(6月21日)

室堂－〈六道、釣鐘堂〉－懺悔坂－【祓堂】－【御本社】－【玉殿の岩屋】－室堂平－藤橋(近迎え)－芦峯寺(泉蔵坊)泊

室堂に宿泊し、雄山頂上の御本社参拝を目指して夜明け前に出発している。

夜をこめて室堂を発し雪谷を横切二渡りわらしをはきかへ、①六道、つり鐘堂あり。懺悔坂、祓堂、夫より一の越、五の越までのぼりて御本社なり。伊弉諾伊弉冉の尊を祭る。②佐伯有頼公の鎌、大刀其外靈宝多し。又もとの道へ下向する右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、③自然岩屋内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、此矢ハ本社ニ納む。(甲本)

①山中の釣鐘堂

下線部①のように、政香は御本社に向けて室堂を出発した後に懺悔坂、祓堂付近で釣鐘堂を目にしている。明治以前、立山山中では到る所に梵鐘(喚鐘)(以下、総称して釣鐘)があり、立山信仰の唱導に重要な役割を果たしていたと考えられている⁽³⁹⁾。確かに、複数の立山曼荼羅や山絵図には立山山中に有ったとみられる釣鐘、屋根をつけて釣鐘の吊した堂舎が描かれている。『立山寄付券記』⁽⁴⁰⁾には、越中国内だけでなく金沢や江戸、京都からも釣鐘が寄進されたことが記され、その数は10口にもなる。しかし、それらが時代を通じて存在していたのか、或いは自然環境の中で破損していつの頃かに失われたり、逆に新たに寄進されたりして時代によって場所や数が異なっていた可能性もあり、いつ頃に、何処に幾つ存在していたのか詳細は明らかではない。しかも、近代になると廃仏毀釈が影響し明治以降にその大方は売却や破損により散逸した。加えて太平洋戦争時の金属回収に伴う供出でも失われ、嘗て立山に関係した釣鐘で現存するものは僅か4口である⁽⁴¹⁾。

これまで「立山紀行文」には山中の釣鐘を記録したものが少なかったので、ここで新たに「本史料」の記載を加えて、山中の釣鐘・釣鐘堂の位置などを整理しておきたい。

まず、立山曼荼羅や山絵図に描かれた釣鐘(中に釣鐘が見える、またはその存在が推定できる堂舎)を挙げてみる。

先学が指摘しているように、立山曼荼羅は距離感覚や縮尺がデフォルメされているので、岩峯寺や芦峯寺地内に描かれた鐘楼も含め山中の正確な場所や釣鐘の大きさまで読み取ることはできないが、本来なかった場所にわざわざ釣鐘を描き足して誇張するとは考えにくく、大凡の範囲で場所の推定はできる。また紀行文を記した登拝者も、途中で目にした釣鐘の全てを気かけながら登拝していた訳ではないとは言え、目ついた釣鐘をそのまま記録することはあっても、見ていない釣鐘を潤色して記録しているとは考えにくい。

政香が見た釣鐘は、下線部①に「六道、つり鐘堂、懺悔坂、祓堂」とあるものだが、この釣鐘の存在を記した紀行文はこれだけではない。

室戸(註:室堂)立、辰の上刻。又雪の上を下る。雪未だ一丈計りも有ると見ゆ⁽⁴²⁾。道に釣鐘堂、廻り石など諸所行場ある様なれど、雪にて一切知れず。(『九峯修行日記』)

立山曼荼羅や岩峯寺系の山絵図では、懺悔坂に沿って六道(六道両社)⁽⁴³⁾と祓堂の間、また頂上御本社下に描かれているものが多く見られる。しかし、それは岩峯寺系の山絵図にのみ描かれ、芦峯寺系のものに描

かれたものがないのは、両村間の争論や山中の堂舎管理権が関係していたためかもしれない。

管見できた、それらが描かれた山絵図、立山曼荼羅を挙げておく。

(ア) 懺悔坂付近と頂上御本社下の両方に描くもの

*【山絵図】 8枚。富山県立図書館蔵「越中国立山禪定名所附図立山別当」7枚（収蔵番号N31-3、N31-4、N31-5、N31-6、N31-7、N31-8、A03-2）、立山博物館蔵1枚（写真2）。

*【立山曼荼羅】 8本。「玉林坊本」、「中嶋家本」、「志鷹家本」、「立山博物館E本」（写真3）、「飯野家本」、「立山博物館G本」、「立山博物館B本」、「竹内家本」

(イ) 懺悔坂付近にのみ描くもの

*【立山曼荼羅】 8本。「泉蔵坊本」、「宝泉坊本」、「吉祥坊本」、「立山博物館D本」、「中道坊本」、「佐伯家本」、「立山博物館F本」※鐘そのものは描かれず建物のみ、「村上家本」

(ウ) 頂上御本社下にのみ描くもの

*【山絵図】 1枚。富山県立図書館蔵「越中国立山之図」（N31-14）

*【立山曼荼羅】 4本。「龍光寺本」、「専称寺本」、「立山博物館C本」、「称名庵本」

その他の場所にも釣鐘の記録が散見される。「立山紀行文」以外にも『方言修行 金草鞋』には、立山へ寄進する釣鐘を運ぶ様子を描いた挿絵が載せられているのは、立山への釣鐘寄進が少なくなかった傍証のように思われる⁽⁴⁴⁾。

○一の越～五の越に到る禪定道の釣鐘

浄土山方北へ下り一ノ腰へ上ル。鐘有。二ノコシ・三ノコシ・四ノコシ・五ノコシ、鐘ツキ堂有。（『越中道の記 立山』）

一の越から五の越までの各所に堂舎があり、そこに釣鐘が寄進されていたことは『立山寄附券記』にも記載がある。

○血の池の釣鐘

血の池の釣鐘は複数の「立山紀行文」に記載がある。しかし、立山曼荼羅では血の池に鐘、鐘撞堂を描いたものは管見しない。登拝者の釣鐘に対する意識は様々で、多くは一瞥しただけと思われるが、中には寄進の年代や寄進者の名前を見て、それを細かく書いているものもある。

立山血ノ池ぢごくへ越中ふなみ村荒川や清兵衛と申すものゝ妻血ノ池へをちさんけいの人を頼ミ内へ願ヲ立テ、右清兵衛方なあけ候鐘あり（『道中日記』）

この筆者は不詳だが、このように詳細な事情を記述したのは、血の池で聞いた話に強く興味を示していたからであろう。『立山寄附券記』には、天保11年に「一血ノ池地獄ノ鍤鐘壹ツ 下新川郡丹見村ノ大工清兵衛」という寄進の記載がある。『道中日記』はこの寄進と同じ天保11年に登拝した記事なので、真新しい鐘に注目して敢えて記載していた可能性もあろう。

しかしこれが最初に寄進された釣鐘ではなく、『立山遊記』（天保15年）には、

登山ノ者日々血盆経ノ紙を投ぐる故、今ハ池モ埋もレ甚だ浅シ。此处ニ高サ二尺斗リノ鐘二ツ有リ。寛政ノ銘字有リ（『立山遊記』）

とある。下線部のように、血の池では寛政年間に寄進された釣鐘と天保11年に寄進されたものの2口が同時に存在していたと推察される。

政香は文政5年に立山へ登り、血の池を訪れ「終ニ血の池あり。女人成仏の為に血盆経を池中に納む」と

書いているが、前述の寛政年間の銘がある釣鐘については触れていない。

更に血の池の釣鐘については、

坊間ヨリ血文経(マツ)ヲ貫、此池へ流ス事ナリ。此所ニ六観音堂有、鐘有、参詣人ツクナリ。(『越中道の記 立山』)

という記述もある。立山曼荼羅では血の池に観音像(如意輪観音)や、堂舎(如意輪堂)を描いたものを散見する。『越中道の記 立山』の記述に従えば堂舎の中に釣鐘があり、参詣人はそれを撞くことができたようだが、直接釣鐘を描いたものは見られない。

②御本社

御本社の宝物は興味を引くものであったようで、その名称は「立山紀行文」では様々に書かれている。『和漢三才図会』では8種の什物を書くが、その後の登拝者の記載を見ると、時代を経て宝物の一部に変化が見られる⁽⁴⁵⁾。「本史料」に挙げている鎌と大刀は、『和漢三才図会』では「墓股鎌 有頼射レクル熊ヲ之矢ノ根」、「有頼所持ノ刀 無銘」とあるものである。

佐伯有頼公の鎌、大刀其外靈宝多し (甲本)

③玉殿の岩屋

玉殿の岩屋は、開山説話では重要な場所だが「立山紀行文」にはほとんど記載がない。実際に岩屋を訪れ、その中の様子を書いたものは「本史料」と『越中道の記』の他には管見しない。

又もとの道下向する右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、自然岩屋内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、①此矢ハ本社ニ納む。(甲本)

室堂近クシテ玉殿ノ岩屋有。奥行十間程。内ニ蓮花石アリ。阿弥陀仏ノ金像安置。左リノ胸ニ矢ノ穴有り (『越中道の記』)

内部には現在でも石仏や奉納品が中に置かれるが、この中に矢疵阿弥陀が安置してあったことは貴重な情報と思われる。下線部①は御本社の什物で、「佐伯有頼公の鎌」とあるものを指す。

④藤橋(近迎え)

禅定登山を終えて下山してくる者を、宿坊から弁当などを持って迎える「近迎え」の様子が書かれている。近迎えを具体的に記しているものには「本史料」の他、文化10年(1813)と、文政7年(1824)に書かれ同名の『三禅定道中記』⁽⁴⁶⁾がある。(以下区別のため、引用の際は前者を『三禅定道中記』①、後者を『三禅定道中記』②と略記)。何れでも酒が入り、無事に禅定登山から帰り安堵し、称名川の河畔で休息の小宴を張ったことが読み取れる。

八つ時藤橋を渡り、坊よりの迎として酒行厨など贈りにけれハ谷河の端にて喫し、暫休息して七つ半ニ泉蔵坊ニ帰り宿す。(甲本)

藤橋迄坊ノ酒一樽赤飯、面々弁当ニ而迎ひ出ル、坊へ着き候所、暮六ツ着仕候 (『三禅定道中記』①)

夫ノ藤橋迄坊ノ酒一樽赤飯面々弁当ニて迎出ル (『三禅定道中記』②)

(4) 4日目(6月22日)

芦峯寺—下田～森尻…魚津泊

①宿坊の馳走

いよいよ禪定登山を終えて帰途に着く。「本史料」に記載は無いが、山を下りた翌日の朝は十分な食事で栄養を付けるのが習慣で、政香とほぼ同じ時期に三学坊に泊まった禪定者による『三禪定道中記』①、②では、どちらも朝食の内容は「一汁七菜」とあり、かなりの御馳走であったように記している。

そしてこの御馳走と言うのは、十分な食事を食べさせてから山を下ることだけではなく、帰りは宿坊から馬に荷物を積んで送る習慣も指していたようである。

「本史料」では、

廿二日天気よし。泉蔵坊を發す。①坊より地走に馬壹疋荷物をのせてみさと村まで送る三里の間なり(甲本)

廿二日快晴 泉蔵坊より②馬一疋二荷を載せて送る、みさと村迄行程三里也 (乙本)

とある。甲本では下線部①で「坊より地走に」とあるが、これは「馳走」と書くべきところの誤記であろう。また「みさと村」は、芦峯寺から下り3里の距離から考えると下田村を指す。同じ部分は乙本では下線部②で単に馬に荷を乗せて送ってもらう意に書き換えられているが、総合すると「馳走」とは、帰りに荷物を下田付近まで運送する宿坊の持てなしの一部だったと読める。

この「馳走」について『三禪定道中記』①では、

明朝一汁七菜二而御飯出ス、漸く五ツ半二坊を立、其故又御馳走として拾壹人へ馬貳疋出ス、辞退いたし候得共、先例と申、無拋岩倉迄荷物付連レ申候、宿坊礼拾壹人而て金壹両、此當り壹人二付、丁六百文ツツ、荷持案内として一日ニ三百文積り十壹人而て二人連る、此割百九文也 (『三禪定道中記』①)

とある。また『三禪定道中記』②では、

明朝一汁七菜二て御飯出し漸く五ツ半二坊を立、其故又御馳走として拾貳人へ馬三疋出ス、辞退いたし候得共、先例と申、無拋岩倉迄連レ申候、為坊礼拾貳人二て金壹両壹分、荷物山案内として一日ニ三百文積り十貳人二て二人連る (『三禪定道中記』②)

とある。『三禪定道中記』①、②では何れもこのサービスを一度辞退するが、宿坊から「先例」だといわれて「無拋」^{よんどころなく}受けている。宿坊では、師檀関係にある登拝者を「道者衆」として丁重にもてなしたことが知られているが、これもそのような「道者衆」への一連の接待の一部だったようにも思われる部分である⁽⁴⁷⁾。

但し、『三禪定道中記』①、②の2点は何れも芦峯寺三学坊での事例であり「本史料」の泉蔵坊の事例を含めても、これが芦峯寺ではどこの宿坊でも行っていた一般的な接待だったのかを判断するには事例が乏しい。この「先例」の詳細は、宿坊側、禪定者側から事例を集めて今後の研究成果を俟ちたい。

(5) その他の特徴的な記述

①佐々成政のざらざら越えを特記した「付録」

甲本、乙本共に「付録」と見出しを付けて佐々成政のざらざら越えを特記している。

佐々成政さら々越へといふハ、越中富山城主佐々陸奥守成政大軍に圍れ①救兵を信州松本の城に請んとすれと敵海道を遮さして通せず。②成政主従七騎に雪中に③立山をのり越へざら河へ出て松本に至る。ざら河の下を広川という、④湯もとの岩に成政馬の蹄の跡あり。近世加賀の大守立山巡検として三年目ニ家臣、麓を巡る。其節此ざら河へも出るといふ。

登立山懐佐々成政

峯如劔鋒寒最盛 飛鳥^鳥唼翼鳥翔猶病 三冬侵雪濟攀雜 驍勇無双源成政

雪風に 鳥も通^ぬ 立山を ふみ分けへ越し 人をしのはめ (甲本。※乙本も同意だが、短歌は削除)

さらさら越えは、通説では天正12年(1584)冬、小牧・長久手の戦いで孤立した佐々成政が、徳川家康に再挙兵を促すため、富山城から厳冬の北アルプス越え徳川家康のいる遠江の浜松城へ向かうものの、再挙兵を拒否され成政は失意のうちに越中へ帰還したとされる件である。しかし技術的に厳冬期にざら峠を越えたとする史実性への疑問や、別ルートを通ったとする諸説がある⁽⁴⁸⁾。肥後に転封させられた後の成政の悲劇性も加わり、江戸時代以降脚色され歌舞伎や浮世絵の題材にもなり語り継がれる伝説だが、ここで政香が書いている内容は、「佐々成政が冬のざら峠を越えた」というプロットは残るものの、場所や内容がすり替わったストーリーである。

「本史料」とほぼ同時代に書かれた『肯構先達録』に載せられた内容は、200年以上も前の出来事に劇的な苦難の雪山越えを講談調に脚色したものである。それが当時膾炙していた通説と思われるが、これも浜松で家康に挙兵を促すことを目的として書かれている。

しかし「本史料」では通説とは異なる記述が多い。先ず下線部①では行き先が浜松ではなく松本であり、家康との面談が目的ではないこと。随行した家臣の人数も、文献により極秘のため数人であったとするものや100人近くとするものなど諸説⁽⁴⁹⁾ある。次に下線部②では「主従七騎」とするが、『肯構先達録』の「主従九十四人」とは食い違うこと。「佐々成政さらゝ越へというハ」としながら、ざら峠ではなく下線部③では「ざら河」となっていること。また、下線部④に「成政馬の蹄の跡あり」とあるのは、厳冬期に馬に乗って通ったとは考えられないので、ザラ越えの際に立山温泉で日和を待ったという話が伝えられて変化し、温泉の場所と成政を結びつけるモチーフとなった可能性はあるだろう⁽⁵⁰⁾。

小括すると、政香が立山で聞いたのは、芦峯寺を含む立山の人々の口伝で通説が変化したものと考えられる。この他にも、「立山曼荼羅竹内家本」には成政が立山大権現の霊告を受ける姿や、立山温泉で甲冑を脱いだ姿が描かれている。政香よりも後、天保11年に越後から立山を参詣した禅定者の登拝記録には、成政はサラサラ越で信州野口村(現・大町市)へ下ったとする内容⁽⁵¹⁾も見られる。戦国期から250年を経る内に佐々成政のざらざら越えは、ストーリーに様々なプロットを取り込みながら語り継がれて変化していったようである。

「付録」は、政香が立山を訪れてこの説話を聞きその内容に感動して特記したものと思われ、成政の勇敢な行為を称えた七言絶句や短歌を詠んでいる。

②室堂で菜に食べられた薊

室堂では食事の菜に、現地で採集できるタテヤマアザミを食材にしていたようである。アザミは当時から全国で食用にされ、政香の故郷三河地方でも食べていたと思われるが、政香は立山で初めてそれを食べ、三河が思い出されて感慨が深かったのであろう。甲本ではその感動を歌に詠んでいるが、乙本では説明的な記述に変えている。

室堂にて薊葉を煮て出したれハ

木綿たすき 思ひもかけぬ 立山に 薊葉の若葉 くひそめんとハ (甲本)

室堂にて汁のみに薊葉を煮たり、薊葉ハ故郷にあれとも立山ニ而喫しそめしは好因縁とやいはむ。(乙本)

室堂の居住環境が劣悪だったこと⁽⁵²⁾や、高地のために飯が柔らかく炊けないといったことは複数の「立山紀行文」に散見されるが、食事の菜については管見しない。近代になっても、明治34年に立山へ登った

浅地倫の登山記『立山権現』には「立山薊の味噌汁を恵まる味旨くして迎も下界にて喰へぬ靈草たるを知られたり」とあり、物資の輸送が難しい場所では、明治以降もずっと食べられていた貴重な食材だったことが分かる。

③立山を詠んだ歌と漢詩

本文中に心情の表現はほとんどなく、感情や感動は主に詩歌で表現されていることを前述した。政香がその都度感慨を表現している詩歌についても、甲本と乙本では技巧表現を加え推敲した表現の違いが幾つか見られる。

甲本の短歌では、立山に登ったときの、雲海の上に立つその高さへの感動をモチーフとし、一度書いた言葉を消して書き直しつつ言葉を選びながら詠もうとした跡が残っている。

立山にのぼりつれハ鳥の ○ [白雲の千重をおしわけ天そそりたかき立山まで上へに□□□□□□の梯
を見てなりてと其坂尊ふとそれハ] ※ ([] 内は○を付けて後から割書きで挿入した部分。また□□
□□□□部分は、書き直して消されて判読不能な箇所)

きのふ迄 空になかめし 白雲の 上が上へ行 立山のみね
梓弓 矢竹心に 白雲の 立山ふかく いるそ嬉しき (甲本)

それに対して乙本では、甲本にあった2首の短歌を削除して、長歌とその反歌に詠み直している。技巧を凝らした表現と共に、和歌を学び『万葉集』にも造詣が深かったことが分かる。

詠立山歌并短歌

しなさかる こしの国内に 山ハしも さはにあれとも 天雲を 八重おしわけて 天そそり 高き立山 神さひ
し 高根を見まく はろはると かたかひ河の 河の瀬の 流にそひて 水上を 尋のほれハ はるかなる 岸をへ
たてゝ ささかにの いともあやふく 藤つるを かなたこなたに 引むすひ かけし浮橋 通ひつつ 流れを見
れハ 弩の 箭よりもはやし 瀧ち行 其水音ハ 鳴神の なるにまさりて なるとかや そをきく人ハ 魂も きゆ
はかりなる 心地して 渡はつれハ して立る 杉の木かけの 向つをの 坂道をさへし いはほとし のほるた
つきに 朽ちかけし くさりにすかり 岩かとを ふみならしつ 谷見れハ さかまく水も わきあかり 湯玉
たはしり もゆる火の きゆる時なく 立燈 たゆる世もなく いにしへゆ 今もさかりに 見る人の かたりに
すれハ きく人の 見まくほりする 是神山を

反歌

きのふまで 空になかめし 久堅の 雲はふもとに 立山のみね
天そそり そそりたゝせる 白雲を 八重おしわけて 立山のみね (乙本)

立山を初めて神の山と詠んだ大伴家持をオマージュするように、長歌は「見まくほりする 是神山を (見たいと願う、この神の山を)」と結んでいる点、また下線部に用いられた表現からは、『万葉集』に載る大伴家持やそれに和した大伴池主の長歌の表現を踏まえて言葉を選び詠んでいることが分かる⁽⁵³⁾。

まとめにかえて

小稿では、江戸時代の立山禅定登山の実態、特に山中の様子を明らかにすると共に『北游藁』の特徴や史料価値の考察のため、政香が立山を訪れた4日間を抄出して取り上げた。その結果、「本史料」は、山中で仲語が語っていた具体的な案内の内容に、これまで知られていた「立山紀行文」の記載を補完する内容を含むものであることが明らかになり、近世の立山禅定登山の実態が分かる史料の一つと見ることができる。

立山禅定登山の部分は分量としては全体の1割程でしかないが、「本史料」全体を通して見たとき、政香

が記録した各地の内容からは、18世紀末～19世紀初期に於ける知識人の旅の実態を知ることができる史料でもある。

また、政香の思想や教養については、「本史料」が持つ記録性、国学者・文人としての知識教養に裏打ちされた見聞や、文献を用いた内容の増補、挿入された和歌や漢詩の分析からも明らかにされることであろう。

そして立山に関しては、「本史料」が特に三禅定の事例の多く見られる三河地方の人物が書いたことに鑑みれば、立山に先立って訪れた白山禅定登山の部分、また文政元年に富士山へ登った際の紀行文『東游藁』の内容を併せてその実態を整理することで、今後の三禅定の研究の進捗にも貴重な史料だと考えられる。

[謝辞]

「本史料」の複写と小稿への翻刻文掲載に際しては、ご所蔵の西尾市岩瀬文庫より格別のご配慮をいただきました。お名前を挙げて感謝申し上げます。

[註]

- (1) 農山漁村文化協会『江戸時代 人づくり風土記③ふるさとの人と知恵 愛知』（農山漁村文化協会、1995年）「8 豊橋 三河の歴史、人物伝をまとめた渡辺政香と在郷の人々」参照。
- (2) 註（1）に同じ。
- (3) 前掲農山漁村文化協会、『西尾市史3 近世下』、など。
- (4) 愛知県教育会・愛知一師偉人文庫『新編愛知県偉人伝』（川瀬書店、1934年）124頁参照。
- (5) 最後の旅は天保9年（1838）、63歳の時に寺津八幡宮の御朱印改めのため江戸へ行ったもので、この時には国学者平田篤胤に会っている。
- (6) 註（1）に同じ。
- (7) 函番号168-84。この中には、紀行文『西游藁』序文の添削も含まれる。
- (8) データベースの解説 (<https://adeac.jp/iwasebunko/catalog/mp01810300> 2025.12.10閲覧) には、添削後の部分「北越富山駅有神通河源從飛驒出而入北海矣河広貳百余歩水勢急激架橋無因建柱於兩岸以鉄鎖繫船六十四艘以作河梁」が載る。この部分を甲本、乙本と三者で校勘すると、甲本には「北越」がなく、「無因建柱於兩岸」は乙本では「不可架橋建杭於兩岸」となっている。政香は推敲の際には添削を受けた結果を基にしつつも、必ずしも添削結果をそのまま差し替えた訳ではなかったことが分かる。甲本、乙本ではこの他の表現や内容の差異にもこれと同様の経緯があったものと推定される。
- (9) 甲・乙2件を一括し、共に岩瀬文庫での函番号（資料番号）は166-157。
- (10) 6月14日、白山山中の記述には「此辺の谷々石に波華、金杯草、銀杯草、玉簪花、桜草、桔梗、女郎花、百合其外千草の数しらす、黒百合の花又多し」や、雷鳥を詠んだ七言絶句「題雷鳥／白山靈鳥称雷禽 形似鳩雛毛彩深 不識生涯弓繳懼 出栖積雪万重岑」を挿入している。
- (11) 立山では岩嶽寺から芦嶽寺へ向かう行程に2か所、桑谷、不動堂から10間ほど行った所に水があることを記している。
- (12) 住谷雄幸「江戸時代の山岳紀行—三山（富士・白山・立山）紀行を中心に—」（『山梨英和短期大学紀要』30巻所収、1996年）119～120頁参照。
- (13) 加藤基樹「中世「三禅定」覚書—三禅定研究のゆくえ—」（富山県立山博物館『研究紀要』第18号所収、2011年）95頁参照。
- (14) 刷物の表題は共通して「越中国立山禅定名所附図別当岩嶽寺」だが、図版の構図や文章の細部に差異のある版が複数存在する。該当箇所では「有若・有頼」（「有若左衛門・有頼」を含む）とするものは、富山県立図書館蔵（収蔵番号N31-2、N31-3、N31-6、N31-7）、「有頼・有頼」は、富山県立図書館蔵（N31-4、N31-5、N31-8）、立山博物館蔵2点、「有公・有頼」は富山県立図書館蔵（A03-2）が確認できる。現存するものを管見した限りでは「有頼・有頼」の記載は少なくない。
- (15) 寺口けい子「芦嶽寺善道坊諸国檀那廻りの実態」（『富山史壇』67号所収、1977年）23～24頁参照。に「嘉永三年御祈祷檀那覚帳」をもとに、三河国で配札に訪れた146ヶ村を表にまとめている。各宿坊家は布教先が競合しないように国毎に振り分けられていたとされるが、原則的な縛りはあってもその布教先は、檀那株として売買されていたことも分かっている（『立山町史』上巻 806頁）。また尾張、三河、駿河など現在の愛知県を中心にした地方に檀那場を持つ

た日光坊、泉蔵坊、大仙坊、善道坊は昭和に入っても戦前までこの地方での配札を続けていた歴史を踏まえると、江戸時代からも地域的に檀那場は入り組んでいたとすれば、政香は泉蔵坊と師檀関係を結んでいたとも考えられる。

- (16) 木倉豊信編『越中立山古文書』（立山開発鉄道、昭和37年）に収載の「一山会本（権教坊本）」を底本とした翻刻による。
- (17) 『富山県史 資料編 I 古代』に収載の翻刻による。
- (18) ほぼ同時期の文化9年に立山に登った富山藩士野崎雅明の『立山ノ記』では、「橋ヲ過ギテ姥堂アリ、又云フ、慈興、母アリ、卒シテ後、興、エヲシテ其ノ肖像ヲ作ラシメ、此ノ中ニ置ク」と記している例がある。
- (19) 富山県立図書館蔵（請求番号 N31-3、N31-8）。
- (20) 佐伯立光『立山史談』（私家版、昭和40年）77頁参照。中世以前は仏名に因んだ「勝妙滝」、「唱名滝」などが用いられていたとするが、何れも仮名書きすると「せうめう」の表記には合致しない。
- (21) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、筆者、書かれた年は未詳。木倉豊信氏はこれを正徳・享保の頃に書かれたものと推定する。五来重編『修験道史料集 I 東日本篇』（名著出版、昭和58年）540～543頁。廣瀬誠による同史料解題733～734頁参照。
- (22) 浅倉有子『方言修行 金草鞋について』（『十返舎一九・越後紀行集第2巻 越中立山参詣紀行』所収、郷土出版社、1996年）によると、一九は文政9年に越後塩沢に鈴木牧之を訪ねた後、越中、加賀方面へ旅をしたと推測され、その際の立山での見聞が基になっているものと考えられる。
- (23) 『立山・黒部山岳遺跡調査報告書』（富山県埋蔵文化財センター、平成28年）24頁参照。
- (24) 浅地倫『立山権現』（中田書店、明治36年）13頁参照。
- (25) 表紙の原題は「伊勢参宮／西国札所／諸神社拜礼／道中日記」、天保11年の越後国魚沼郡芦ヶ崎村大倉与市郎の道中記。『富山史壇』197号、198号に鈴木景二氏による翻刻がある。
- (26) 前掲佐伯立光、75頁参照。
- (27) 加藤基樹「立山権現 [矢疵阿弥陀如来] の史料的考察—立山信仰と生身仏信仰—」（富山県立山博物館『研究紀要』第24号所収、2018年）53頁参照。
- (28) 佐伯幸長『立山信仰の歴史と源流』（立山神道本院、昭和48年）534～536頁参照。
- (29) 前掲佐伯立光、76頁参照。
- (30) 前掲佐伯立光、75頁参照。材木坂の説話として、有頼の継母藤波が連れていた「禿」と言う侍女が峯本社を建立するために積んであった材木に腰かけたところ、山住神女が「この用材は穢れている」と怒り、突き崩した材木が石になったとする説話を載せている。この「禿」は更に別の原因で杉にされ、禿杉と呼ばれることにも連動する。
- (31) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、筆者は不明。天保11年から14年にかけて越中各地を歩き、その見聞を記した紀行文。『越中道の記』は、富山県立図書館が同資料をマイクロフィルム化した際に付けた標題で、所蔵先の標題は「五ヶ山大牧入湯の記」。立山の部分は、天保12年に訪れた際のもの。前掲五来、545頁、廣瀬誠氏による同史料解題734～735頁参照。
- (32) 細木ひとみ「新出の「立山曼荼羅」からみる立山信仰の一考察」（富山県立山博物館『研究紀要』第30号所収、2024年）65頁、82頁参照。
- (33) 拙稿「明治以降りライトされた「有頼開山説話」に関する一考察—様々なサブストーリーの存在とその拡散をめぐって—」（富山県立山博物館『研究紀要』31号所収、2025年）22頁参照。
- (34) 前掲富山県埋蔵文化財センター、25頁参照。
- (35) 前掲拙稿、21頁、34～35頁参照。有頼の渡河と登山に際して遭遇する「獅子」を、岩嶽寺では「猪」に芦嶽寺では「鹿」と解釈した異なる説話が別々に伝承している例がある。
- (36) 鈴木正崇「女人禁制と山岳信仰」（三田哲学会、『哲學』第149集所収、2023年）148～149頁「3. 女人結界の禁忌」参照。立山の姥石とその類話の比較と考察については、柳田国男「比丘尼石の話」（『定本 柳田国男集』第4巻所収、筑摩書房、1963年）275頁、281頁参照。
- (37) 米原寛「立山室堂について」（富山県立山博物館『研究紀要』第2号所収、1995年）45～46頁参照。文政9年頃に3棟の内1棟を廃絶し2棟となったとするが、政香が泊まった文政5年に2棟としている点とは相違があるようにも見える。その頃建物は残存していても運用していなかったなどの理由で2棟としているのかもしれない。それ以降の『立山記』（天保11年）には「室堂両屋」、『立山遊記』（天保15年）には「室戸ハ二ヶ所アリ」とあり、2棟になっていたことが分かる。
- (38) 例えば『立山遊記』には、堂内には炊事で焚いた煙が充満する狭い室内に数百人がひしめき、蚤も多く夜も安眠できな

い。また外は人糞が散乱し歩けないなどの状況が記される。ほぼ同年代の『登立山記』でも「宿者填满、各不容寝」「戸外為厠、便溺满地、臭気可悪」とあるので、この時期の状況は政香のときも大差無かったであろう。

- (39) 加藤基樹「安養寺妙慶寺蔵『立山来迎仏』について」(富山県立山博物館『研究紀要』第16号所収、2009年)28~29頁参照。
- (40) 岩嶺寺雄山神社文書 史料137。引用は『越中立山古文書』に収載の翻刻による。
- (41) 立山山中の梵鐘の存在や現存、寄進等の経緯についての考察は、斉藤善夫「近世越中立山諸堂の鐘」(『富山史壇』第104号、1991年)、及び前掲加藤(2009)に詳しい。
- (42) 登拝道には、浄土山の山腹にかかる大きな雪渓を横切る地点があった。この雪渓は万年雪で、秋になっても大量の雪があったと言われる。『富山県歴史の道調査報告書—立山道—』(富山県教育委員会、1981年)55頁参照。
- (43) 立山曼荼羅では、その付近に6つの堂舎を描くものが多く見られる。六道(六堂)の意なのかもしれない。前掲富山県埋蔵文化財センターによれば、現在の登山道では室堂の南70mのところから祇堂に向かって石敷の道が整備されているが、調査によってその60~120m北にある道跡が江戸時代の登拝道であることが分かり、その付近の大岩の上には焼く骨が残る納骨遺跡がある。山絵図ではその辺りが「六道両社」の描かれている場所になることから、その大岩の上には祠があった可能性が高いと報告している。
- (44) 『方言修行 金草鞋』には、小杉宿の茶屋で、摂津から立山へ奉納する鐘を「越中／立山奉納」と書かれた札を付けた屋根付きの函車に載せて引く挿絵がある。この話自体は潤色があるかもしれないが、この場面には「一年、一九立山へ参詣せし時、目の当たりに見たる」とも書いていることから、全く根拠のないフィクションではないだろう。
- (45) 『立山遊記』には、先年富山町人から寄付されたという6寸程の古鏡があったことを書いている。『登立山記』では、この古鏡について「鏡背有貞観二十年銘。制造奇古。背面刻富山岡宜休納之七字」と書くが、寄進した岡宜休は町人ではなく富山藩士。
- (46) 文化10年、文政7年の三禅定の旅で書かれた道中記。遠州山名郡二ノ宮村山田岩蔵と記名された『西国道中記』と一括で保存されていることから山田岩蔵本人、或いは山田家の身内の旅を記録したものと考えられる。鈴木景二『三禅定道中記』『西国道中記』—富士山・立山・白山、関西の旅』(『富山史壇』第207号所収、2025年)に史料紹介と翻刻文がある。
- (47) これが道者衆への接待の一部だったとすれば、註(15)で触れた点に照らして、政香が泉蔵坊と師檀関係を結んでいたことと同時に、泉蔵坊が三河国寺津村一帯にも檀那場を持っていたことの傍証となるだろう。
- (48) 米原寛「佐々成政の「ザラザラ越え」考」(富山県立山博物館『研究紀要』第14号所収、2007年)35~38頁参照。
- (49) 『武徳編年集成』巻之三十には「壯者百人二櫓掛サセ、今日(註：天正12年11月23日)外山城ヲ登シ更ニ越ノ難所雪深ヲ踏分テ赴キシカ、また『川角太閤記』巻三には「供の者六人召連れ我が国(註：越中国)を竊に罷り出候てはま松へ参り候」、絵本太閤記第五編巻之七には「腹心の近士武部兵庫の頭をはじめ五拾余人を引きつれ時冬の中比なれば白妙に降積し数丈の雪を踏分け道もなき険阻を凌ぎ」などがある。「本史料」の「主従七騎」は、『川角太閤記』の記述に成政自身を加えれば人数としては符合するので、政香が聞いた伝承の元になっていた可能性はあろう。
- (50) 江戸時代になってから行われた実踏調査を記録した「立山ザラ越之圖」(個人蔵、富山県立山博物館寄託)では立山温泉からザラ峠に向かう道筋に、「天正十二年佐々成政十一月十四日当山ヲ出テ此所ニ入湯シ日和ヲ考、雪中ノ信州エ越ト云、夏土民入湯」と書き込みが見える。
- (51) 『新 綜覧 立山曼荼羅』(富山県立山博物館、2022年)98~99頁「竹内家本に描かれる“佐々成政”」参照。天保11年9月に越後国頸城郡福嶋村の関根新左衛門が記した『越中立山参詣記』には「佐々成政は弥陀ヶ原の一ノ腰へ掛りサラサラ越。信州野口村(現・大町市)へ道下る」とあることを紹介している。旧野口村に当たる大町市平野口の西正院には、天正12年にザラ峠を越えて来た佐々成政が立山から持ってきて寄進したと伝わる大姥尊坐像がある。
- (52) 註(38)に同じ。
- (53) 下線部の表現には、大伴家持の「立山の賦一首」(『万葉集』巻第17 4000)の歌い出し「天ざる 鄙に名かかず 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも さはに行けども すめ神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる 片貝川の 清き瀬に (以下略)」や、大伴池主「敬みて立山の賦に和ふる一首」(『万葉集』巻第17 4003)の歌い出しに見える「朝日さし そがひに見ゆる 神ながら み名に帯ばせる 白雲の 千重を押し別け 天そそり 高き立山 (以下略)」などを意識して言葉を選んだ表現で、甲本で詠んだ感動に、家持や池主が詠んだ立山の歌へのオマージュを込め、改めて詠みなおしたものと思われる。

表3 藤橋と称名滝の表記の揺れ

番号	1	2	3	4	5	6
資料名	行脚文集	一宮巡詣記	奥山廻泊處 人足覚立帳	立山道名所	三岳紀行	立山紀行
年代	天和3年 (1683)	元禄9年 (1696)	正徳2年 (1712)	正徳・享保頃 (1711~1735)	宝暦10年 (1760)	寛政10年 (1798)
藤橋	葛藤の弦橋	*1			くす(葛)橋	藤橋
称名滝	勝妙の瀧	浄明が瀧	正明ノ瀧	照名ヶ瀧	シヤウメウカ瀧	勝妙の瀑布
番号	7	8	9	10	11	12
資料名	立山ノ記	三禅定道中記①	九峯修行	北游藁 (甲・乙)	三の山巡	三禅定道中記②
年代	文化9年 (1812)	文化10年 (1813)	文化13年 (1816)	文政5年 (1822)	文政6年 (1823)	文政7年 (1824)
藤橋	*2	藤橋	藤橋	藤橋*3	藤橋	藤橋
称名滝	勝妙瀑布	しやう明が瀧		称名瀧	シヤウメウが瀧	しやうめうのたき
番号	13	14	15	16	17	
資料名	登立山記	道中日記	越中道の記 立山	立山遊記	山絵図 (岩峯寺)	山絵図 (芦峯寺)
年代	天保11年 (1840)	天保11年 (1840)	天保12年 (1841)	天保15年 (1844)	江戸時代	
藤橋	藤橋	藤橋	藤橋	藤橋	藤橋(ふじはし)	ふぢはし
称名滝	称名瀑	しやうみやうが瀧	正妙ノ瀧	称名瀧	しやうめうのたき	せうめうのたき

【出典】

- 「行脚文集」:正式表題は「日本行脚文集」。俳人大淀三千風の紀行文。表記の確認は橋本龍也編『越中紀行文集』(桂書房、1994年) 収載の翻刻による。
- 「一宮巡詣」: 神道家橋三喜の紀行文。表記の確認は前掲橋本収載の翻刻による。*1本文中に藤橋の名称はなく、「藤綱にて橋を渡し」とする。
- 「奥山廻泊處人足附之覚帳」: 正式表題は「正徳二年／西水橋勘左衛門同道二而上山さら越奥山廻仕足并と泊所付之立帳」。十村内山村平三郎の覚帳。表記の確認は奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』(桂書房、1990年) 収載の翻刻による。「藤橋」の記載はない。
- 「立山道名所」: 筆者不明の道中記。表記の確認は五来重編『修験道史料集I 東日本篇』(名著出版、昭和58年) 収載の翻刻による。
- 「三岳紀行」: 文人画家池大雅の紀行文。表記の確認は菅沼貞三「大雅の三岳紀行」(『美術研究』73号、1938年) に掲載の翻刻による。藤橋の名称はなく、葛の蔓で架けられた橋の意か。
- 「立山紀行」: 富山藩士、歌人佐藤月窓の紀行文。表記の確認は富山県郷土史会校注「肯構泉達録」の翻刻による。
- 「立山ノ記」: 富山藩士、野崎雅明の紀行文。表記の確認は富山県郷土史会校注「肯構泉達録」の翻刻による。*2本文中に藤橋の名称はなく、「藤枝ヲ編ンデ橋トナシ」とする。
- 「三禅定道中記①」: 本文註(46)に同じ。
- 「九峯修行」: 正式表題は「日本九峯修行日記」。修験者野田泉光院の旅日記。表記の確認は前掲橋本収載の翻刻による。
- 「北游藁」: 表記は甲本、乙本とも同じ。*3乙本の本文中には、「蔓を引渡して橋となせり」と加筆がある。
- 「三の山巡」: 尾張藩士某の紀行文。表記の確認は加藤基樹「三禅定」考—成立と『三の山巡』にみる実態—(富山県立山博物館『研究紀要』第17号、2010年) に掲載の翻刻による。藤橋には「藤橋とイェトモ藤ニアラズ。山ブドウノツルナリ」と書き添えている。
- 「三禅定道中記②」: 本文註(46)に同じ。
- 「登立山記」: 富山藩士、漢学者大塚敬業の紀行文。表記の確認は前掲橋本収載の翻刻による。

- 14 「道中日記」：本文註（25）に同じ。
 15 「越中道の記 立山」：筆者名不詳の旅日記。書名は富山県立図書館による仮題。表記の確認は前掲五来収載の翻刻による。
 16 「立山遊記」：加賀藩士で儒学者の金子盤蝸の紀行文。表記の確認は正橋剛二氏の翻刻による。
 17 「山絵図」：岩嶽寺で作られたもの、芦嶽寺で作られたものに分けて確認。表記の確認は富山県立図書館、立山博物館所蔵資料による。芦嶽寺と岩嶽寺では仮名表記が異なる点は興味深い。

翻刻文

凡例

- ・割書き部分は [] で表記した。読みやすいように日付ごとに行を空け、定型詩（長歌、和歌、漢詩）は字下げし、句と句の間を空けた。
- ・句読点、括弧は筆者が付けた。
- ・墨で線を引き消して推敲した部分の判読不明文字は、☐で示した。
- ・変体仮名はひらがなに、旧字、異体字は可能な限り常用漢字に直したが、合字「㍑」は残した。

1. 甲本 「序」と「本文 立山山中部分」

(1) 「序」

北游藁序

上古跋涉名山靈嶽者少矣。神武帝如越紀山而出芳野、日本武尊攀白井而躋膽吹為追伐逆賊者、更非探山水奇勝矣。其余雄武之士精修苦行者未聞窮其勝矣、况凡俗之徒矣。

皇国大嶽之中富士立峯白山歴世遼邈而尤峻秀也。然上古未曾聽跋涉者、漸至大宝年間而得役居士攀富頂佐伯有頼登立峯泰澄窮白嶺矣。雖然世尚草昧或戰伐後而無相繼而躋攀者惜哉。皇国之靈嶽道尚茅塞而歴数千歳矣、可謂遺憾之甚歟。近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年⁽¹⁾有三岳之遊。因余幸稟生於昇平數百歳之間、不知擊劍汗馬之勞、山路猛獸之害、夜行姦賊之怖矣。是輒遇跋涉窮搜之時可喜国恩矣。繇此以少々有遠游之癖、粗窮東西之諸勝、未至北陸居諸荏苒逼知命之年矣。旧友諫余曰「足下矍鑠而雖不知沈痾老後不堪跋涉、夫不可失時奚為被羈區々風塵早快遠游矣」。余聞此不堪感激、水石之癖軫切也。便請暇老親命駕千里矣。旧友之一言中心藏之記、以為因併述昇平国恩之感以冠游藁云。 文政五歳次 壬午林鐘⁽²⁾

(2) 「本文 立山山中部分」

富山駅ニ昼飯を喫し岩倉の里ニ至る。其間の田中ニ自然石の大碑八尺余あり、田中倒れ伏せり。渡過道の三字斗り見ゆ、何人の碑なるや知難し。[大森村にて河を渡るによし／大森権現の森あり]

岩倉村立山権現の別当にして坊舎式十四坊あり、本坊を岩倉寺という。神明 天神 八幡 若宮 岩崎 新宮七社あり。立山大権現ハ伊弉諾、伊弉冉の靈体一切男女の元神にて此峯を城都として上下人の父母なる故に邪正ともに利益す、謂る越の大宮なり。四十式代聖皇文武神託によつて佐伯有頼公を越の領主に下し玉ふ。二神わさと鷹に化現して嫡子有頼を峯中に引入す。則玉殿岩屋の内にして先代祖々の法を受持し頓悟す。依て慈興と称し中興の開山なり。大宝元年に別当岩嶽寺を立。又四月八日に権現告て曰靈天ニハ峯に住し龍花会を待、上天にハ此処に住してそつ寂光を守る。是垂後の地なり。諸堂精舎を造立し、毎年此日祭礼修行なすへしと云云。今ニ七社の神輿をすへ、衆者を揃へ兒の舞法華問答あり。此山の地主ハ手力雄の尊なり。天平七年行基菩薩此峯によちのほり諸嶽を拝し、岩倉寺五智の尊像を造立し講堂に安置し玉ふ。

岩倉より壺里程行てとちの木の下に至茶屋あり、木陰ニ而涼しき処なり。又半道程行ハ右ニ清水あり、次に津加沢村⁽³⁾暫く行て観音あり。爰に清水あり。坂を越へて芦倉村ニ到り泉蔵坊ニ舎る、蚊帳を止む。

姥堂前の橋を浮橋という。橋の数板の数欄干ニ到る迄、皆諸仏菩薩の員数法華經の文字ニ合せて架すという。橋本に拾抱余の杉四五本あり。姥堂中尊ハ沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊なり。此山ハ天降り玉ふという。其外

六十六ヶ国の姥御前の像あり、或説に有頼公の母上像なりともいう。大宝三年八月十二日忌日なる故毎年秋の彼岸の中の日に供養あり。

廿日天気よし。泉蔵坊を発し姥堂を来端あら谷⁽⁴⁾に到る、爰二式丈斗の滝あり。藤橋

いさ越ん 神の恵みを杖として千尋の谷にかかる藤橋

藤橋を渡り称名川にて垢離す。こかね坂、せんじゆ原、せんじゆ堂あり。是より美女杉迄一里、此間に熊野権現の社あり。昔材木拵へ所へ女人来る故材木石になる、以立積ミ横積ミの形なり、是を材木坂という。かきか首、又鷲の岩屋あり。若狭国長良の尼の下女美女杉となる。七度浮橋の用木となりて成仏せんと誓つて伐迄ハ芽を生して大木となり、七度目に枯たり。今は切株ばかり也。此処水なし。ふな坂まで一里此間にしかりはりという穴あり。右の尼かふるをしかりなから小便するに、ならくまで穴通りしとなり。たんさいのみさかと云坂あり。ふたんくハう仏ちんざ、かふる⁽⁵⁾かふる杉となる、廻り八尺⁽⁵⁾斗り高さ三間四方にたれてしんなり、廻り三十間はかりあり。ふな坂よりくわ谷へ一里此間左二称名滝を拜、ふしおかみという。かりやす坂、くわ谷此所に室あり。清水あり、昼飯を喫す。不動堂まで壱里此間にくはさき観音堂あり。不動堂ハ式間に三間なり。堂より右十間斗り往て水あり。追分迄一里此間に湯道あり、松尾越という。阿弥陀原薬師如来なり。右ハ姨がふところ道、右の尼、石となる女人の形あり。左ハ一の谷道のほりハ此道を往き下向は姨かふところを下る也。上野迄一里此間に二の谷小鎖、一の谷大鎖あり。三条小鍛冶宗近が作という。獅子か鼻の岩屋弘法大師こま修行の灰あり。さゝ峠坂の左の方畜生原、此処にふしきの牛馬を見る事多し、面ハ人間にして四足あり。下市場迄一里此間に鏡石あり。右尼姨かふところにて権現に鏡を上るに石となる、式間四方あり。小杉谷下市場上市場あり。聖霊市をなす故に市場という。左は大日か嶽右は国見か嶽此間に横渡りという処、雪の上五丁はかり往く、かんせきの谷なり。不信心の者畜生出て通り難し。地獄谷の追分あり。右は室堂道なり。左は地獄道高塔婆という処に塔婆あり。右の山ハ大天狗小天狗の御在所なり。室堂式軒、四間二五間余なり。地獄廻り最初さいの河原八寒地獄は大池⁽⁶⁾なり。雪解の水漕り落つ、水色藍の如し。夫ハ百三十六地獄を廻り終二血の池あり。女人成仏の為に血盆経を池中に納む。廻り終りて室堂ニ帰り此夕室堂に籠る。

廿一日天気よし。夜をこめて⁽⁷⁾室堂を発し雪谷を横切二渡り⁽⁸⁾わらしをはきかへ、六道、つり鐘堂あり。懺悔坂、祓堂、夫より一の越五の越までのぼりて御本社なり。伊弉諾伊弉冉の尊を祭る。佐伯有頼公の鎌、大刀其外靈宝多し。又もとの道へ下向する右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、自然岩屋内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、此矢ハ本社ニ納む。室堂帰り支度してもとの道に帰る。八つ時⁽⁹⁾藤橋を渡り、坊よりの迎として酒行厨⁽¹⁰⁾など贈りけれハ谷河の端にて喫し、暫休息して七つ半⁽¹¹⁾二泉蔵坊ニ帰り宿す。

付録

佐々成政さらゝ越へといふハ、越中富山城主佐々陸奥守成政大軍に囲れ、救兵を信州松本の城に請んとすれと敵海道を遮さして通せず。成政主従七騎に雪中に立山をのり越へ、ざら河へ出て松本に至る。ざら河の下を広川という。湯もとの岩に成政馬の蹄の跡あり。近世加賀の大守立山巡検として三年目ニ家臣麓を巡る。其節此のざら河へも出るという。

登立山懐佐々成政

峯如劔鋒寒最盛 飛鳥唼翼翔猶病 三冬侵雪濟攀雜 驍勇無双源成政
雪風に鳥も通ハぬ 立山をふみ分けへ越し 人をしのはめ
立山ニのぼりつれハ鳥の ○ [白雲の千重をおしわけ天そそり／たかき立山まで上へに□□□□□□の梯を見てなりてと其坂／尊ふとそれハ]

きのふ迄 空になかめし 白雲の上が上へ行 立山のみね

梓弓⁽¹²⁾ 矢竹心に 白雲の立山ふかく いるそ嬉しき

室堂にて薊葉を煮て出したれハ

木綿たすき⁽¹³⁾ 思ひもかけぬ 立山に 薊葉の若葉 くひそめんとハ

廿二日天気よし。泉蔵坊を發す。坊より地走に馬壺疋荷物をのせてみさと村まで送る三里の間なり。(以下略)

2. 乙本・「序」と「本文 立山山中部分」

(1) 「序」

北游藁序

上古跋涉名山靈嶽者少矣。如神武帝躡紀山而出芳野、日本武尊攀白井而躡膽吹為追伐逆賊者、其余雄武之士及精修苦行者、未嘗聞探奇究游覽登涉者、况凡俗之徒乎。皇国大嶽之中富士立峯白山歷世遼邈而尤峻秀也。然上古未曾有跋涉者、漸降至大宝年間而得役居士躡富頂佐伯有頼登立峯泰澄窮白嶺矣。雖然世尚草昧或戰伐之後而無繼其高而躡者惜哉。皇国靈嶽蹊尚茅塞而歷数千歳矣、可謂遺憾之甚歟。近世洛池大雅甲高孺皮勢韓大年有三岳之遊、因号三岳道者唯竊惜其跡、雖奇其文未題亦未聞紀行及吟咏流播於無者也。余幸稟生於昇平之間、不知擊劔汗馬之勞、夜行姦賊之畏矣。得跋涉名山大門之時可喜国恩矣。從未有遠游之癖、粗窮東西之諸勝、未至北陸居諸徃苒逼知命之年矣。友人告余曰「今足下雖康強而無沈痾老至不堪跋涉、時不可失被区々風塵蓋早快速游矣」。余聞此感激、乃請暇老親命駕千里矣。旧友之一言中心藏之記、以為因併述昇平国恩之所致以冠游藁云。

文政五歳次壬午林鐘 源政香 書于保宝葉園⁽¹⁴⁾

(2) 「本文 立山山中部分」

富山駅二而昼飯を喫し岩倉二至る、田中二自然石にて八尺余碑あり、渡過道の三字見えて田中倒れてあれハ外ハ見えす、いかなる碑なりや後人の考をまつ。大森村にて河を渡るによし、大森権現の社あり。岩倉寺社領五十石別当天台宗妻帯。爰に坊舎式十四坊あり、本坊を岩嶺寺といふ。神明 天神 八幡 若宮 岩崎 新宮七社あり。立山大権現ハ伊弉諾、伊弉冉の靈体一切男女の元神にて此峯を城都として上下人の父母なる故に邪正ともに利益す。謂る越の大宮なり。四十式代聖皇文武神託によつて佐伯有頼公を越の領主に下し給ふ。二神わざと鷹に化現して嫡子有頼を峯中に引入、則玉殿岩屋の内にして先代祖々の法を受持し頓悟す。依て慈興と称し中興の開山なり。大宝元年に岩倉寺を立、又四月八日に権現告て曰灵天ニハ峯に住し龍花会を待、上天にハ此処に住してそつ寂光を守る。是垂後の地なり。諸堂精舎を造立し、毎年此日祭礼修行なすへしと云云。今ニ七社の神輿をすへ乗者を揃へ兒の舞法華問答あり。此山の地主ハ手力雄命なり、天平七年行基菩薩此峯によちのほり諸嶽を拜し岩倉寺五智の尊像を造立し講堂に安置したまふ。岩倉より壺里程行てとちの木の下に至茶屋あり、木陰にていと涼し。又半道程行ハ清水あり、津加沢村観音あり、爰にも又清水あり、坂を越へて芦倉村泉蔵坊に舍る、蚊幘用いす。姥堂前橋を浮橋といふ。橋の板数欄干に到る迄皆諸仏菩薩の員数法華經の文字に合して架す。橋本に拾抱余の杉四五本あり。姥堂中尊ハ沙土煮尊、大戸辺尊、惶根尊なり。此山へ天降り玉ふ。其外六十六ヶ国の姥御前の像あり。或説に有頼公の母上像なりといふ。大宝三年八月十二日忌日なる故毎年秋の彼岸の中の日に供養あり。

廿日快晴。夜をこめて姥堂を過ぎあら谷に到る。式丈余の滝あり。藤橋、蔓を引渡して橋となせり。称名川、こかね坂、せんじゆ原、せんじゆ堂あり。是より美女杉まで一里、此間に熊野権現の社あり。昔材木を切出す処に女人来る故材木化して石となる、是を材木坂といふ。かきか首、又鷲の岩屋あり。美女杉といふハ若狭国長良の尼の下女七度浮橋の用木となりて成仏せんと誓つて芽を生し七度目に枯たり。今は切株はかり残れり。此辺水なし。ふな坂まで一里此間にしかりはりとふ穴あり、右の尼かふるをしかりなから小便するに、ならくまで穴通りしとなり。たんさいのみさかと云坂あり。ふたंकうハう仏ちんざ、かふるかふる杉となる、廻り八尺はかり高サ三間四方にたれてしなし、廻り三十間はかりあり。ふな坂よりくわ谷へ一里此間左ニ称名滝を拜ム、ふしおかみといふ。かりやす坂、くわ谷此所に室あり。清水あり、昼飯を喫す。不動堂まで一里此間にくハさき観音堂あり。不動堂ハ式間に三間なり。堂より右へ拾間はかり往て水あり。追分迄一里此間に湯道あり、松尾越といふ。阿弥陀原薬師如来。右ハ姨かふところ道、右の尼、石となる女人の形あり。左ハ一の谷道のほりハ此道下向は姨かふところを下る也。上野迄一里、此間に二の谷小鎖、一の谷大鎖あり。三条小鍛冶宗近が作といふ。獅子か鼻の岩屋弘法大師こま修行の灰あり。さゝ峠坂の左の方畜生原、此処ふしきの牛馬見る、面ハ人間にして四足あり。

下市場迄一里此間に鏡石あり。右尼姨かふところにて権現に鏡を上るに石となる、式間四方あり。小杉谷下市場上市場あり、聖霊市をなす故に市場といふ。左は大日か嶽右は国見か嶽此間横渡りとい、雪の上五丁はかり往く、かんせきの谷なり。不信仰のものあれハ畜生出て通り難し、地獄谷の追分あり。右は室道左は地獄道、高塔婆という処に塔婆あり。右の山ハ大天狗小天狗の御在所なり。室ハ式軒、四間二五間余あり。地獄廻り最初さいの河原八寒地獄ハ大池なり。雪消の水漕り落る水藍の如し。夫ハ百三十六地獄を廻り終ニ血の池あり、女人成仏の為に血盆経を池中に納む。廻り終りて室堂へ歸る。此夕室堂に籠る。婆沙論ニ南瞻部州下過五百由旬、乃有其獄有大有小大則八寒八熱小則一々大獄四門各有四、小獄共為十六小獄云云。八大地獄に各有十六別処共百三十六地獄也。

詠立山歌并短歌

しなさかる⁽¹⁵⁾ こしの国内に 山ハしも さはにあれとも 天雲を 八重おしわけて 天そそり 高き立山 神さひし 高根を見まく はろはると かたかひ河の 河の瀬の 流にそひて 水上を 尋のほれハ はるかなる 岸をへたてゝ ささかにの⁽¹⁶⁾ いともあやふく 藤つるを かなたこなたに 引むすひ かけし浮橋⁽¹⁷⁾ 通ひつつ 流れを見れハ 弩の 箭よりもは やし 瀧ち行 其水音ハ 鳴神の なるにまさりて なるとかや そをきく人ハ 魂も きゆはかりなる 心地して 渡はつれハ して立る 杉の木かけの 向つをの 坂道をさへし いはほとし のほるたつきに 朽ちかけし くさりにすかり 岩か とを ふみならしつ つ 谷見れハ さかまく水も わきあかり 湯玉たはしり もゆる火の きゆる時なく 立燈 たゆる世もなく いにしへゆ 今もさかりに 見る人の かたりにすれハ きく人の 見まくほりする 是神山を

反歌

きのふまで 空になかめし 久堅の⁽¹⁸⁾ 雲はふもとに 立山のみね
天そそり そそりたゝせる 白雲を 八重おしわけて 立山のみね

廿一日天快晴。夜をこめて雪谷を横切に渡り行ハ、六道、つり鐘堂あり。懺悔坂、祓堂、夫より一の越、五の越までのぼりて御本社なり。伊弉諾伊弉冉の尊を祭る、佐伯有頼公の鎌、大刀其外霊宝おゝし。又もとの道へ下る右に玉殿の岩屋あり。奥行拾間余、自然石岩屋の内に蓮花石金像の弥陀あり。左の脇に矢の穴あり、此矢ハ本社に納む。室堂に帰り山を下る。八つ時に藤橋につく。宿坊よりの迎として酒行厨など贈りけれハ、暫休息して右行厨を喫し、七ツ半に泉蔵坊ニ歸り、此夕再泉蔵坊に宿す。

付録

佐々成政さらゝ越へというハ、越中富山城主佐々陸奥守成政大軍に困れ、救兵を信州松本の城に請んとすれと敵海道を遮て通せず。成政主従七騎に雪中に立山をのり越へ、さら河へ出て松本に至ると云云。ざら河の下を広川といふ。湯もとの岩に成政馬の蹄の跡あり。近世加賀の大守、立山巡検として三年目に家臣麓を巡る、其節此のざら河へも出るといふ。

登立山懐佐々成政

峯若劔鋒寒最盛 飛禽唳翼翔猶病 三冬侵雪濟攀誰 驍勇無双源成政
室堂にて汁のみに薊葉を煮たり。薊葉ハ故郷にあれとも立山ニ而喫しそめしは好因縁とやいはむ。

廿二日快晴 泉蔵坊より馬一疋二荷を載せて送る、みさと村迄行程三里也（以下略）

[註]

- (1) 高孺皮（享保7年～天明4年）は甲斐出身の儒学者、画家。孺皮は字、高芙蓉とも。韓大年（享保12年～寛政7年）は伊勢出身の書家・画家。大年は字、韓天寿とも。共に池大雅と三禅定を成し遂げ、三岳道者と号する。
- (2) 旧暦六月の異称。
- (3) 岩嶮寺から芦嶮寺に向かう道に「津加沢村」の地名は見えない。しかし、文中に「岩倉より壱里程行てとちの木の下に至茶屋あり」、「又半道程行ハ右ニ清水あり、次に津加沢村」とあること、『越中道の記 立山』には横矢村（横江村）に「岩

クラが一。茶や有。」とあること、また『富山県歴史の道調査報告書—立山道—』（富山県教育委員会、1981年）に、千垣で新道と旧道が交差する付近に立山参道三十三観音の石仏（千手観音）が立ち、付近に旅人に飲水を供した場所跡が存在する報告があることから考えて、横江村から半里先の千垣村を指すものと推定される。

- (4) 嬭堂から布橋を過ぎ、藤橋へ向かうほぼ中間点に「荒谷」の地名が存在するが、そこにあった滝については不詳。
- (5) 山絵図に刷られた禅定道案内には「廻り八尺」とあり、政香はこれに依っている。仲語も通常はそれに沿って伝承を語っていたのか、多くの「立山紀行文」ではこの数字を記している。ただ、管見した中で「立山ノ記」には「大キサ十尺圍ナル者アリ」とある。しかもそれに続けて美女杉やしかりばり、禿杉の説話は「一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ。」とあり、仲語の話を一蹴するような書き方をしているので、敢えて素直に八尺を取らなかったのかもしれない。
- (6) みくりが池。
- (7) 夜が明けきらないうちから。
- (8) 本文註(42)と同じ。
- (9) 午後2時頃。
- (10) 酒と弁当。『三禅定道中記』①、②では具体的に酒一樽と赤飯の弁当とある。
- (11) 午後5時頃。
- (12) 歌は、立山の奥深くまで登って来てきたことを感慨深く、嬉しく感じたとの意であろう。梓弓は「射る」に掛かる枕詞。「いる」は「居る」と「射る」の掛詞。弓、矢、射る、は縁語。
- (13) 「掛く」に掛かる枕詞。ここでは「思いがけずに」の意味を導く。禪、掛ける、は縁語。
- (14) 磯泊散人、臥蝶園、仙雲亭寿山など同様に、政香の号の一つ。ここでは政香の寓居を指す。
- (15) 「越」に掛かる枕詞。
- (16) 「糸」に掛かる枕詞。ここでは「糸」を副詞の「いと」と掛詞にしている。
- (17) 「天の浮橋」(布橋)ではなく、藤橋のこと。
- (18) 「雲」に掛かる枕詞。



写真1 「立山曼荼羅立山博物館H本」(当館蔵)より部分
「びじよう杉」と名付けられた杉(美女杉)が切株から新たな幹や葉を茂らせている。



写真2 「越中国立山禪定名所附図別当岩嶽寺」(当館蔵)より部分
 囲み部分2箇所（雄山頂上御本社下、懺悔坂の右側）に「かねつき（鐘撞）堂」が見える。

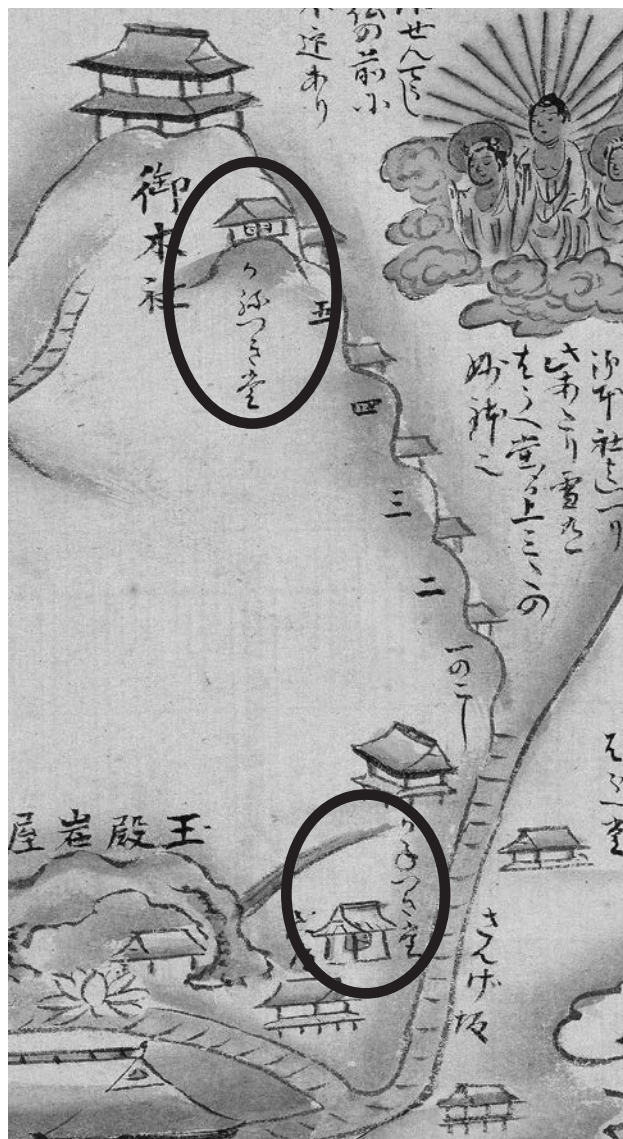


写真3 「立山曼荼羅立山博物館E本」(当館蔵)より部分
 囲み部分2箇所（雄山頂上御本社下、懺悔坂の右側）に「かねつき（鐘撞）堂」が見える。

